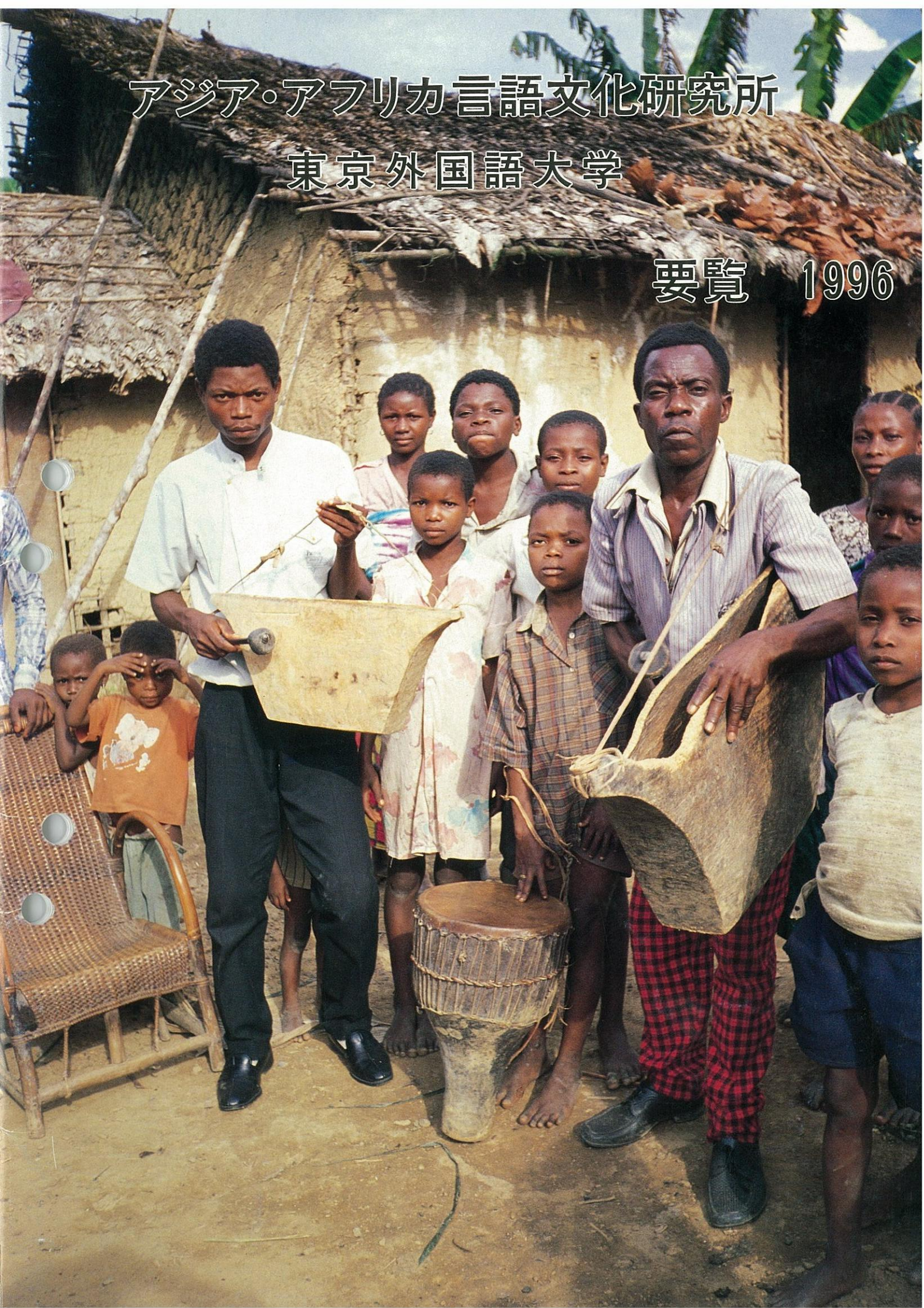


アジア・アフリカ言語文化研究所

東京外国語大学

要覧 1996



目 次

概 要

歴史と性格……………1
組織……………3
研究部門構成……………4
職員……………6
運営委員・専門委員……………8

研究活動

共同研究プロジェクト……………9
国際シンポジウム……………19
国際学術交流……………20
長期研究者派遣……………23
短期共同研究員(公募)・大学院・研究生…24
言語文化情報の統合化……………25
言語研修……………26

施 設

電算機室……………27
図書室……………28
音声学実験室……………29
出版物一覧……………30

表紙写真説明

レガ族の伝達用太鼓。アフリカには、いくつかのタイプの伝達用太鼓があるが、ザイール東部に住むレガ族のものは、一本の木をくり貫いたもので、大きなハンドバッグのような形をしている。この側面を、片手で持った一本のバチ——先にはゴムが付いている——で叩くわけであるが、上の方を叩けば高い音が出る。この音の高低で、ことばの声調をなぞるわけである。音は、5、6キロ先までは十分届く。一度、練習で、「お客が来たからみんな集まれ」という文を覚えてもらい叩いていたら、本当にそこいら中から人が集まり、用もないのに叩くなと、叱られた。

(梶 茂樹)

INSTITUTE FOR THE STUDY OF LANGUAGES
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA
TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES

4, NISHIGAHARA, KITAKU, TOKYO 114

TEL. 03-3910-9147

FAX. 03-5974-3838

Cable Address: GENGOBUNKA TOKYO

概 要

歴 史 と 性 格

アジア・アフリカ言語文化研究所は、人文科学・社会科学系では、我が国ではじめての共同利用研究所です。共同利用研究所の使命は、全国の研究機関に所属する専門の研究者のために設備や資料を提供し、研究交流の機会をつくり、それによって研究の進展を促すことです。

戦後の復興が進むなかで、日本の運命がアジア・アフリカ諸国と深くかかわりあっていることが認識されはじめました。このような背景のもとに、1961(昭和36)年に日本学術会議がアジア・アフリカ言語文化研究所を設置するよう勧告しました。その後、各方面の理解と協力を得て、1964(昭和39)年4月1日、本研究所は東京外国語大学附置の共同利用研究所として発足しました。本研究所の設置目的は、次のようにまとめられています。

- 1) アジア・アフリカの諸言語の研究、およびそれらを通じて、アジア・アフリカ諸地域の歴史・社会・文化を直接研究すること。
- 2) それらの言語による資料の利用を容易にするための辞典を作成すること。
- 3) それらの言語修得を助けるため、言語研修を実施すること。

以来、30年以上を経過して、本研究所をとりまく諸事情は大きく変わりました。学界では、人文・社会科学の分野で、言語学・歴史学・人類学などのような、すでに確立している学問体系に依存した個別的な研究分野をのり越えた新しい学問・理論構築への要請が高まってきました。それは、近年における国際化、地域の枠組みの流動化、民族・宗教問題の激化、都市化現象の進展などの急激な世界情勢の変化、および、狭い地域的枠組みにとらわれないより広域な視野からの研究の必要性に対する認識の深まりなどに関連しています。他方、最近における情報処理技術の発達なかで、文字のみならず音声や画像の処理が可能になり、さらに、これらを個別の情報としてではなく一つの情報ネットワークに統合化する研究が急速に進展してきています。

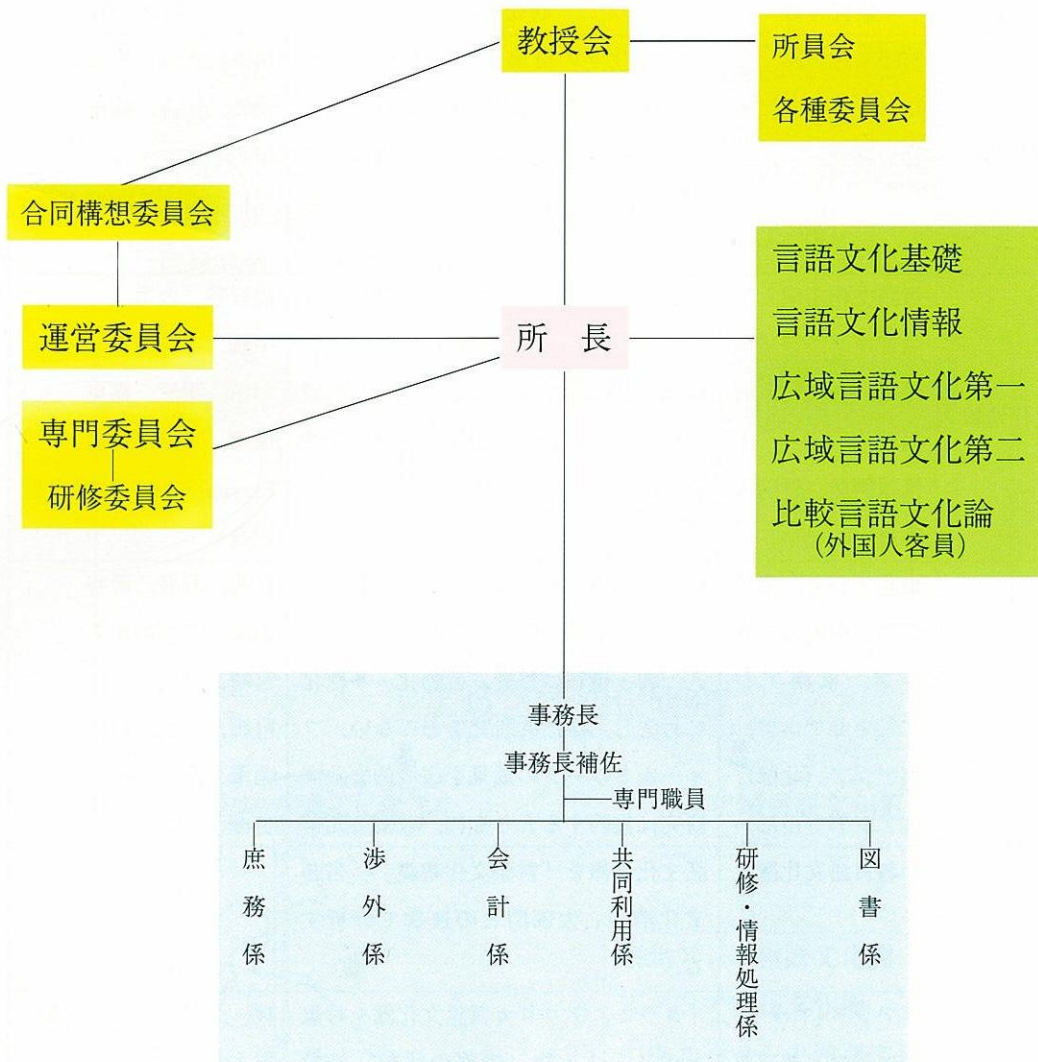
以上のような学問的・社会的要請，アジア・アフリカ地域の社会情勢の変化，科学技術の発達に対応して，本研究所は1991(平成3)年度に，研究体制の抜本的見直しをおこない，従来の16小部門・1客員部門(外国人)を，4大研究部門・1客員部門(外国人)に再編成しました。4大研究部門では，言語を媒介として成立している文化を総合的に研究する学問である「言語文化学」理論の構築，広域的なフィールドワークや共同研究の実施，情報の統合化処理のための理論と方法の開発などをめざしています。さらに，東京外国語大学に1992年度に新たに設置された大学院地域文化研究科博士後期課程を全面的にバックアップするために，多くの教官が参加し，教育活動にも力を注ぎ始めています。また，1995年度から，卓越した研究拠点(COE)の形成に係わる「中核的研究機関支援プログラム」が発足したのに伴い，本研究所はその対象機関に指名され，従来にもまして，アジア・アフリカ地域の言語文化研究に先導的役割を果すことになりました。

冷戦構造崩壊後の流動する世界情勢と情報ネットワーク化のめざましい技術革新にすみやかに対応して，我が国における言語文化研究の発展に貢献するとともに，我が国とアジア・アフリカ諸国との学術文化交流に積極的に寄与することが，本研究所の責務であり，所員一同の願いでもあります。



1989年12月18日，韓国全羅北道南原郡の農村にて。この農村出身の死者を故郷の山に埋葬することになり，手伝いの村人が喪輿を担ぐための網を稲藁で結っている。(本田 洋)

組 織



(1996年4月1日現在)

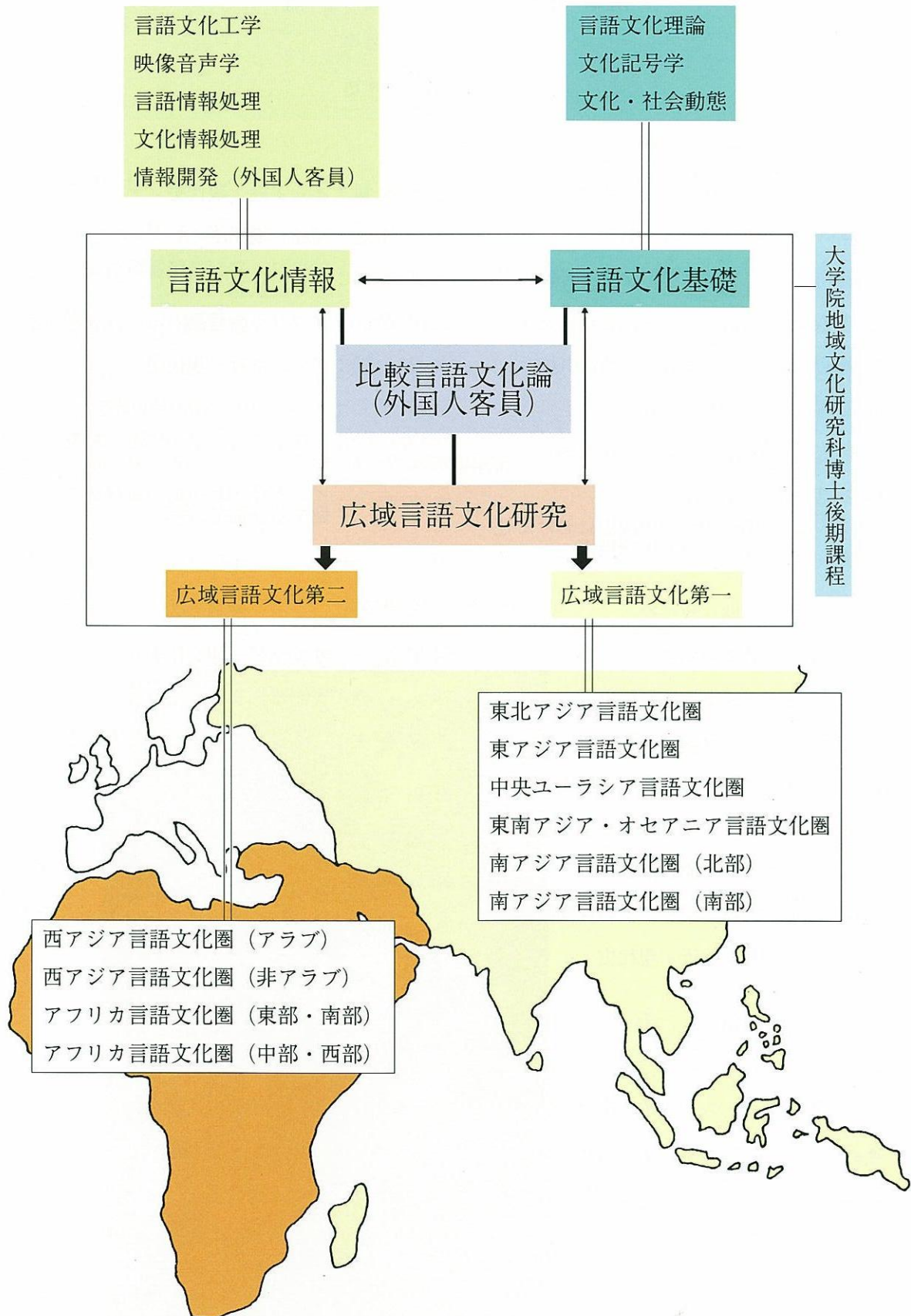
区 分	教 授	助教授	講 師	助 手	その他の職員	計
定 員	(4) 17	17	0	8	27	(4) 69

()は外国人客員数を外数で示す

研究部門構成

部門名	研究分野	研究内容	所属研究者
言語文化基礎	言語文化理論, 文化記号学, 文化・社会動態	言語文化学の構築を図るためにアジア・アフリカの言語文化を比較・分析し, 歴史学, 文化人類学, 言語学など関連諸研究分野の成果を統合して理論化する。	松下, 水島, 家島 新免, 根本, 峰岸 田辺
言語文化情報	言語文化工学, 映像音声学, 言語情報処理, 文化情報処理, 情報開発 (外国人客員)	アジア・アフリカの言語文化情報の分析・処理と新しい情報処理システムの構築, 及び情報処理した言語文化情報の提供, 共同利用・公開のための手法を開発する。	加賀谷, 坂本 中嶋, バースカララーオ 小田, 栗原, 高島 深澤, 本田, 真島 Elayaperumal (外国人研究員)
広域言語文化 第一	東北アジア, 東アジア, 中央ユーラシア, 東南アジア・オセアニア, 南アジア (北部), 南アジア (南部) の各言語文化圏	東は沿海州より西はフィンランドあるいはインド亜大陸までを対象とする。人・物・情報の移動, 流動化・多様化に対応し, 学際的研究をおこない, フィールドワークの成果を広域的な共同研究に集約するとともに, 収集した言語文化情報を「言語文化基礎」・「言語文化情報」大部門との連携で分析する。	池端, 石井, 新谷 内藤, ダニエルス 宮崎, 中見 町田, 三尾, 森 菊澤, 澤田, 西井 吉澤
広域言語文化 第二	西アジア (アラブ), 西アジア (非アラブ), アフリカ (東部・南部), アフリカ (西部・中部) の各言語文化圏	イスラム, アフリカ言語文化圏を対象とする。人・物・情報の移動, 流動化・多様化に対応し, 学際的研究をおこない, フィールドワークの成果を広域的共同研究に集約するとともに, 収集した言語文化情報を「言語文化基礎」・「言語文化情報」大部門との連携で分析する。	梶, 上岡, 川田, 中野 黒木, 高知尾, 羽田 林, 飯塚
比較言語文化論 (外国人客員 ※COE分)		言語文化学の確立を図るために, 外国人研究者 (特にアジア・アフリカ諸国) を客員教授として招へいし, 共同研究を推進する。	Doan Thien Thuat 尹紹亭 Peter Kenneth Austin ※Wazir Jahan Karim ※Haryo Suhardi Martodirdjo ※李範文

動的なアジア・アフリカ言語文化の構築をめざす研究部門構成図



職 員

所長 (併任) 教授 池 端 雪 浦

研 究 部

教 授

- | | |
|--|-----------------------------------|
| 池 端 雪 浦：フィリピン近・現代史 | 内 藤 雅 雄：インド近・現代史 |
| 石 井 溥：南アジアの人類学 | 中 嶋 幹 起：漢語・満州トウングース語 |
| 加 賀 谷 良 平：音響音声学， アフリカ諸言語 | 中 野 暁 雄：アフロ・アジア諸言語および
その民族誌 |
| 梶 茂 樹：バンツ諸語， 言語人類学 | 松 下 周 二：アフリカの言語 |
| 上 岡 弘 二：イラン諸語， イスラムの民間信仰 | 水 島 司：南インド近・現代史 |
| 川 田 順 造：アフリカ文化 | 宮 崎 恒 二：オーストロネシア諸社会の研究 |
| 坂 本 恭 章：オーストロアジア諸語 | ペーリ・バー：南アジア諸言語の比較・対象
スカララーオ・研究 |
| 新 谷 忠 彦：言語哲学 | 家 島 彦 一：インド洋・地中海の海域史に
関する基礎的研究 |
| クリスチャン・16～20世紀中国史における社
ダニエルス・会， 経済および技術 | |

助 教 授

- | | |
|-----------------------|--|
| 小 田 淳 一：計量文献学 | 羽 田 亨 一：サファビー朝文化史研究 |
| 栗 原 浩 英：ヴェトナム現代史 | 林 徹：言語学， チュルク諸語 |
| 黒 木 英 充：東アラブ近・現代史 | 深 澤 秀 夫：マダガスカルを中心とするイ
ンド洋海域世界の社会人類学 |
| 新 免 康：中央アジア近・現代史 | 町 田 和 彦：ヒンディー語 |
| 高 島 淳：言語情報処理とヒンドゥー教 | 三 尾 裕 子：東アジアの人類学 |
| 高 知 尾 仁：世界表象と象徴性 | 峰 岸 真 琴：オーストロアジア諸言語 |
| 中 見 立 夫：内陸・東アジアの国際関係史 | 森 幹 男：インドシナ比較文化史 |
| 根 本 敬：ビルマ近・現代史 | |

助 手

- | | |
|---------------------|----------------------|
| 飯 塚 正 人：イスラム学 | 西 井 涼 子：東南アジアのエスニシティ |
| 菊 澤 律 子：オーストロネシア諸言語 | 本 田 洋：韓国・朝鮮の人類学 |
| 澤 田 英 夫：現代ビルマ語の文法 | 真 島 一 郎：西アフリカの人類学 |
| 田 辺 明 生：南アジアの文化と社会 | 吉 澤 誠 一 郎：中国近現代史 |

事 務 部

事 務 長 肥 田 久 光

事務長補佐 田川 恵二

専 門 職 員 浅 見 義 則

庶 務 係

係 長 松 本 省 三

主 任 石 鍋 誠 子

文部事務官 小 林 浩

会 計 係

係 長 木 村 明 雄

文部事務官 大 島 俊 宏

文部事務官 岡 戸 彰 二

文部事務官 福 田 華 恵

研修・情報処理係

係 長 石 橋 徳 三 郎

主 任 今 井 健 二
文 部 技 官

文部事務官 中 嶋 弘 子

文部事務官 小 笠 原 信 博

渉 外 係

係 長 加 藤 淳

主 任 谷 川 かつ 子

文部事務官 田 部 井 直 美

共同利用係

係 長 仲 勝 司

主 任 金 井 京 子

文部事務官 津 田 貞 子

図 書 係

係 長 佐 藤 剛

主 任 中 川 陽 子 (休 職)

主 任 須 郷 知 子

主 任 西 浦 数 雄

文部事務官 近 藤 晴 彦

文部事務官 大 島 大



テンボ族のヤシ油づくり。ザイール東部のテンボ族は、標高900 mから1400 mくらいの起伏状の土地に住んでいる。標高の低い地域では油ヤシの木が植わり、男たちがせっせとヤシ油をつくっている。このヤシ油は、彼らの基本的調味料で、肉なども一度水で煮て血抜きをしてから、これで炒めることが多い。(梶 茂樹)

運 営 委 員

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授で組織する教授会においておこなわれますが、共同利用研究所としての本来の機能を適切に遂行するため、これとは別に運営委員会が置かれ、研究所の運営の基本方針などの重要な事項について、所長の諮問に応えます。運営委員には研究所の教授・助教授、および所外の学識経験者など、25名以内が委嘱されます。第16期(1995.2~1997.1)の運営委員は現在以下の通りです。

石 井 溥 所 員	田 中 二 郎 京都大学教授
石 井 米 雄 上智大学教授 (京都大学名誉教授)	田 中 敏 雄 東京外国語大学教授
石 毛 直 道 国立民族学博物館教授	谷 泰 京都大学教授
伊 谷 純一郎 神戸学院大学教授 (京都大学名誉教授)	土 田 滋 順益台湾原住民博物 館長
梅 田 博 之 麗澤大学教授 (東京外国語大学名誉教授)	中 野 暁 雄 所 員
應 地 利 明 京都大学教授	西 田 龍 雄 京都大学名誉教授
大河内 康 憲 大阪外国語大学教授	間 野 英 二 京都大学教授
久 馬 一 剛 滋賀県立大学教授 (京都大学名誉教授)	宮 岡 伯 人 京都大学教授
古 賀 正 則 明治大学教授	宮 本 正 興 大阪外国語大学教授
興 水 優 東京外国語大学教授	家 島 彦 一 所 員
斯 波 義 信 国際基督教大学教授	矢内原 勝 常葉学園浜松大学教 授 (慶應義塾大学名誉教授)
末 成 道 男 東京大学教授	山 崎 利 男 中央大学教授 (東京大学名誉教授)
祖父江 孝 男 放送大学教授 (国立民族学博物館名誉教授)	

専 門 委 員

所長の諮問に応じて、研究所の共同研究に関する専門的事項を審議する専門委員会があり、委員は所外の学識経験者のうちから委嘱されます。1996年度の委員は以下の通りです。

研修委員会

梅田博之、大江孝男(東京外国語大学名誉教授)、大河内康憲、大東百合子(明海大学学長)、小澤重男(東京外国語大学名誉教授)、興水優、柴田紀男(天理大学教授)、土田滋、富盛伸夫(東京外国語大学教授)、西田龍雄、宮本正興

研 究 活 動

共同研究プロジェクト

共同利用研究所である本研究所にとって、所員が中心となって所外の研究者と共同で推進する共同研究プロジェクトは、最も大切な研究業務のひとつです。これまで数多くのプロジェクトが組織され、多様な研究成果をあげてきました。

また、本年度からは、共同研究プロジェクトの目指す、従来の研究分野を超えた研究交流と広範で斬新な共同研究を一層推進するため、重点プロジェクトを設けることになりました。3年をめどに、集中的に共同研究を進めます。今年度はとりあえずひとつの重点プロジェクトがスタートしますが、来年度以降、さらにいくつかの重点プロジェクトが組織される予定です。

本年度のプロジェクト名と各プロジェクトの研究代表者・共同研究員は次のとおりです。

重点共同研究プロジェクト

東南アジアにおける人の移動と文化の創造 (宮崎恒二)

(所員 8 名, 共同研究員 40 名)

諸文化の形成に関して、これまでの文明中心的の発想から地域中心的な発想への転換が進んでいるが、かつて「文明の十字路」として捉えられた東南アジアの諸地域についても、地域的なネットワークの存在とその役割が強調されつつある。このような発想の転換は、必然的に現在の諸文化の形成過程を人の移動と交流という観点から見直す方向へとわれわれを導き、また、人の移動が様々な形で現在進行中であることは、今後この地域でどのような文化が形成されるのか、という関心を喚起する。現在の東南アジア諸地域は、一方ではいわゆる民族問題の火種を常に抱えつつ、他方では欧米的価値観との差異化を目差して「国民文化」のみならず「アジア文化」という意識さえ次第に形成されつつある。このような意識の「広域化」と「個別化」を、人の移動による集団の同化と異化という観点から読み解き、これまでの東南アジアの諸文化の形成過程を捉え直すとともに、今後の広域的意識形成の動向についての考察を試みるのが本プロジェクトのねらいである。

青山 亨	飯島明子	池上重弘	石川 登	伊藤 眞
上杉富之	牛島 巖	内堀基光	小野沢正喜	オマル・ファルーク
加藤 剛	川島 緑	川田牧人	黒田景子	桑原季雄
小池 誠	清水 展	白石さや	杉島敬志	鈴木伸隆
関本照夫	染谷臣道	高谷紀夫	田中恭子	坪井善明

床呂郁哉	土佐桂子	富沢寿勇	中澤政樹	速水洋子
深見純生	福岡正太	古田元夫	宮本 勝	森山幹弘
山下晋司	山田幸宏	結城史隆	横山廣子	吉田敏浩

一般共同研究プロジェクト

言語研修 (梶 茂樹)

(所員16名, 共同研究員7名)

言語研修委員会は、その分野に精通する研究者によって構成され、アジア・アフリカの言語に習熟し、実際に役立つ能力を高める最も効果的な方法を検討することを目指しています。

短期集中言語研修の目標は、

- 1) 口語及び書き言葉の能力をつける。
- 2) 言語の科学的研究と実際の応用の訓練の提供。
- 3) 大学院相当の学生に野外調査を実施するための手段としての言語習得の援助。

専門委員会が年2回、専門委員・共同研究員合同会議が年1回開催され、研修言語の選定、教授法、開催時期・期間、実施方法、評価等について討論します。

大坪一夫	栗谷川福子	小森淳子	坂本比奈子	長野泰彦
森安孝夫	吉川武時			

音・図像・身体による表象の通文化的研究 (川田順造)

(所員11名, 共同研究員19名)

この学際的共同研究では、音（音声言語を含む）、図像（文字を含む）、身体による表象を、相互に関連させてとりあげ、通文化的な視野で検討します。これらの総合されたものとしての映画・演劇も対象とします。異質な媒体による表象をあえて関連させ、対比することによって、それぞれのうちに、あるいは全体の中に、隠れていた特質や問題を発見してゆきます。

第3年度目までは、基本的な問題の設定、音・図像・身体それぞれを媒体とする表象の事例研究を通して問題の検討を行いました。第4年度目は、より抽象度を高め、異なる媒体の表象を関連・対比させてとりあげ、「表象」という概念についても学際的な視野で再考します。

大森康宏	加藤千代	吉川周平	小松和彦	佐藤深雪
卜田隆嗣	菅原和孝	塚田健一	鶴岡真弓	出口 顕
友枝啓泰	野村雅一	藤田隆則	堀内 勝	森山 工
山口 修	山本順人	吉田憲司	渡辺公三	

言語文化接触に関する研究 (中嶋幹起)

(所員 9 名, 共同研究員 28 名)

東アジアに共生する幾多の民族の言語は多様性に富み, その長い歴史と相まって, 多くの言語資料が集積されています。さらに, 近年は中国やソ連などの開放政策により学術成果も公にされつつあります。

本プロジェクトでは, 朝鮮語, 満州語, モンゴル語, エウエンキ語, 漢語, ウイグル語, チベット語, 苗語, 西夏語, 白語, 東南アジア諸語等の言語研究者が現地調査での成果を報告し, それぞれの研究について, 言語学のみならず, 文化人類学, 歴史学などの分野を含めた多角的かつ広域的視点から討論をおこないつつ, 言語のダイナミックスを探ります。

伊藤英人	鵜殿倫次	大江孝男	太田 斎	大瀧幸子
大塚秀明	大橋由美	落合守和	北村 甫	栗林 均
慶谷壽信	佐々木猛	佐藤 進	佐藤晴彦	高田時雄
津曲俊郎	富平美波	中川千枝子	西 義郎	花登正宏
樋口康一	平田昌司	藤本幸夫	星実千代	細谷良夫
前川捷三	村上嘉英	森安孝夫		

個別言語データの分析・記述と言語類型論 (林 徹)

(所員 4 名, 共同研究員 47 名)

この共同研究プロジェクトは, 各参加者が自分が専門とする言語の音韻・形態・文法データを持ち寄り, それらを他の言語の研究者と一緒に分析することにより, そのデータから得られる知見を, その言語の専門家でない研究者との間で共有できるような, できるだけ一般的な形で提示するための分析・記述方法を開発することを目的としています。こうした作業を通し, 個別言語の研究と言語類型論の研究の双方にとって最適の言語研究のパラダイムを構築することをめざします。

今年度は, 昨年度に続き, 「所有表現」をテーマとし, さらに, 個別言語データを広く共有する具体的な方法のひとつとして, コンピュータの言語研究への利用法も引き続き取り上げる予定です。また, 昨年度開始した語彙機能文法に関する連続セミナーも継続して行います。

相澤正夫	井出祥子	井上 優	宇佐美洋	梅田博之
上野善道	遠藤 史	大江孝男	大堀俊夫	岡田公夫
小川暁夫	生越直樹	尾上圭介	岸田泰浩	児玉 望
坂原 茂	佐久間淳一	佐藤知己	柴谷方良	沈 力
杉浦滋子	高橋慶治	田窪行則	田野村忠温	月田尚美
柘植洋一	土田 滋	角田太作	中川 裕 (Jr)	中川 裕 (Sr)
奈良 毅	西村義樹	仁田義雄	野島本泰	早田輝洋
平野日出征	福井 玲	星 泉	町田 健	松村一登

松本克己 松森晶子 箕浦信勝 宮岡伯人 宇野庸雄
湯川恭敏 渡部 己

物語と民衆の認識世界：物語の発生学（小田淳一）

（所員12名，共同研究員28名）

アラビアン・ナイトが中東・イスラム世界の民衆文化の研究にとってはもちろん，民話研究を含めた物語学一般にとっても最高の資料であることはあらためて強調する必要もないでしょう。アラビアン・ナイトは，ヨーロッパのオリエンタリズム的嗜好が創った西欧文学の不可分の要素として，ヨーロッパとオリエントを相補的に映す鏡でもあります。

本研究では，まずアラビアン・ナイトの誕生と変容に焦点をあて，中世的語りの世界におけるアラビアン・ナイトの生態を見極めたいと思います。その上で，物語がいつどのように発生するのかについて考えるつもりです。「語り」の形態＝媒体が文字テキストと音響映像に分化した現代，特に文学が《書物》として個人空間に閉じ込められた現代において，その分化以前の物語を体現したアラビアン・ナイトについて語ることは，コミュニケーション（＝語り）媒体のモジュール的合体の総和，つまり原初的な語りへの回帰と捉えることもできるマルチメディアの未来を，いわば遡行的に描くことにもつながります。

菟原 卓	大塚和夫	大稔哲也	岡崎桂二	荻野安奈
奥西俊介	奥野克巳	川床陸夫	神郡悦子	小杉 泰
小松和彦	近藤二郎	杉田英明	鈴木孝典	高階美行
永田雄三	中務哲郎	中西 裕	難波雅紀	西尾哲夫
奴田原睦明	堀内正樹	三浦 徹	水野信男	三原幸久
森高久美子	森本公誠	吉村作治		

旅と表象の比較研究（高知尾 仁）

（所員4名，共同研究員8名）

この研究は，他者との出会いを提示し，他者の言表と他者世界が表象するものを解釈し，他者文化の持つ多様な意味を構成する旅のディスクールを主要な対象とする。その際，他者言説を生むコンテキストや，他者の自己（自己文化）との距離・差異の構築や，他者表象が持つ価値評価などが問題となると思われる。他者が直接的に語られるという前提への疑問と他者表象のバイアスと他者についてのディスクールそれ自体が充分に見つめられなかったことへの反省として，近年欧米で飛躍的に研究が進められている旅行記研究に対応して，ここでは，近代ヨーロッパ（ルネサンス以降）の旅のテキストとそのほかの文化の旅のテキストを取り上げるとともに，他者についての多種多様な表象形態やそれに関連した諸理念（例えば，秩序，正義，正統，コスモス）の表象化についても研究の対象とする。

従って、この研究では、旅論・表象論・他者論とそれらの交差する領域が取り扱われることとなる。このような比較研究によって、エクリチュールを有する文化による、他者と他者のいる場所と時間の配置・配列が明らかにされ、またその文化と他者との関係性（例えば、理想、調和、幻想、混乱、絶望、排除）を提示するディスクールが明らかにされるものと期待される。またさらには、他者に対比された自己（自己文化）のアイデンティティーの提示の実体や、文化の普遍性や近代というディスクールについても考察されることが期待される。

荒木正純 彌永信美 宇波 彰 大室幹雄 重松伸司
田中純男 原 毅彦 渡辺公三

アジア・アフリカ言語資料の情報処理と辞典編纂（上岡弘二）

（所員 8 名，共同研究員 20 名）

本プロジェクトは、アジア・アフリカ諸地域における言語資料（テキスト、辞書など）の機械可読形式（machine readable form）化とその利用研究を目的とする。

対象となる言語資料には、既存のメディアや形式の異なる資料（手書き、印刷物、各種テープ、フロッピーなど）ばかりでなく新たに目的別に構築すべき資料（各言語の機械可読辞書など）も含まれる。

またこれらの資料を有機的に利用できる総合環境も研究課題としている。

構築される機械可読形式の資料および研究成果は、本研究所内外の研究者に広く利用してもらうために、公開する予定である。

赤松明彦 家本太郎 内田紀彦 岡口典雄 長田俊樹
小野 基 熊谷康雄 児玉 望 佐々木嗣也 高橋孝信
武内紹人 塚本明廣 中川聡史 中谷英明 奈良 毅
林佳世子 保阪修司 三浦 徹 矢野道雄 山下博司

カンボジア事典編纂のための基礎的研究（峰岸真琴）

（所員 2 名，共同研究員 13 名）

本プロジェクトの設立目的は、カンボジアについて、言語、歴史、民族、民俗、文化、政治、経済、社会等のあらゆる分野において、いわゆる百科事典的な基本的情報を集積していくことにあります。これと並行して、カンボジアに関する基礎的データの充実に役立つような、現在各分野において入手可能な文献、資料のデータベースを作成することも企画しています。

将来的にはその成果を、電子メディアを含む何らかの事典の形式にまとめることを構想しています。

石澤良昭 伊東照司 上田広美 小椋祐美子 高橋宏明
友田 錫 野副由美子 林 行夫 吹抜悠子 福田権一

言語文化データベースの研究と CAI 開発 (町田和彦)

(所員 8 名, 共同研究員 7 名)

本プロジェクトの目的は、アジア・アフリカの言語を中心とした、多様な文化についての情報をデータベース化するための研究と、そのデータを利用して言語文化教育のための CAI 教材を開発することにあります。

アジア・アフリカの言語の大部分は、「特殊な」言語と見なされ、極めて限られた学習の機会しかないのが現状です。また、その話されている地理的、文化的環境が、日本のそれとは大きく違うため、学習内容の理解が困難になることもあります。特に服装、行事、住居など言語による説明よりも、写真や映像にしたものを見たほうが理解が早いものもたくさんあります。

また、言語学習そのものについても、テープレコーダによる録音教材だけでなく、ビデオや写真を組み合わせて構成した教材のほうが効果的なのは当然ですが、そのような教材を開発するには、言語、文化に関する画像、映像資料を常に収集、蓄積し、それを構成化して、いつでも利用可能なデータベースにしておかなければなりません。また、必要な資料を効率よく取り出し、それを有機的に結合して、教育用の CAI ソフトを開発するには、一定のノウハウの蓄積が必要である。

本研究所では、科学研究費補助金による、昭和63年度から平成4年度までの自動化研修システムの試作の成果を踏まえ、新たに平成6年度から、言語文化情報の CAI 化の研究が進められており、4 言語、4 地域の言語文化情報の実用化を目指しています。

本プロジェクトでは、より多くのアジア・アフリカ地域の言語と、その文化的環境を対象にして、

- (1) CAI 開発の資料となる言語・文化情報資料の理論的研究
- (2) 実際の CAI のプラットフォームとなるハードウェア構成の検討
- (3) 現実に稼働している CAI 設備の見学、研究
- (4) CAI システムの制作とその発表、評価
- (5) 効果的なプレゼンテーション、ユーザーインターフェースの研究

を行い、実用的な言語文化に関する自動化研修システムの製作と運用を目指します。

アンドレアス・ヘンドリッヒ 岩居弘樹 大野仁美
坂本比奈子 武井直紀 益子幸江 山内譲二

シャン文化圏に関する総合的研究 (新谷忠彦) (所員 3 名, 共同研究員 5 名)

本プロジェクトは以下の目的をもって共同研究を行い、必要に応じて研究会を開き、その成果を資料集・論文集として出版する。

- (1) 一つの複合文化交流圏 (シャン文化圏) の解明のための方法論の検討。

- (2) シャン文化圏に関する情報収集と現地調査のための準備。
- (3) 現地調査の報告と成果の検討。
- (4) シャン系言語の学習と修得。
- (5) 文献資料及び非文献資料の解説・整理。
- (6) 基本的文献資料の解説出版。

飯島明子 石井米雄 加藤昌彦 加藤久美子 横山廣子

東南アジアにおける「共存」・「共生」の思想 (栗原浩英)

(所員 4 名, 共同研究員14名)

1980年代後半にはいり、東南アジア地域の大部分の国が権威主義体制の動揺、カリスマ的指導者の高齢化、経済発展に伴う中間層の成長、社会主義陣営の崩壊と冷戦的状况の終結など様々な理由により、政治的変動に直面しています。

その中で顕在化してきたひとつの現象に、「民主化」・「和解」などの語に象徴されるような、自らとは異質な集団の存在を認めようとする「共存」志向があります。

本プロジェクトは、これまで対決、闘争、植民地化、統合・被統合、支配・被支配、統治者・被統治者などの観点からとらえられることの多かった東南アジア地域の歴史や社会を、「共存」・「共生」の主体として国家、中央と地方、地域、エスニシティー、政治(イデオロギー)集団、利益集団、宗教集団など多様なレベルを設定し、積極的に学際的なアプローチを導入することによって、再検討しようとするものです。

プロジェクトの継続期間は4年間とし、最終年度には成果を刊行する予定です。

石井和子 加藤久美子 川島 緑 白石昌也 末廣 昭
 高田洋子 高谷紀夫 土佐桂子 林 行夫 速水洋子
 弘末雅士 古田元夫 宮本謙介 吉田敏浩

西南中国非漢族の歴史に関する総合的研究 (クリスチャン・ダニエルス)

(所員 5 名, 共同研究員14名)

現在の西南中国は、もともと非漢族の居住地域であり、中国歴代王朝の支配下に少しずつ組み込まれていく歴史をもつ地域である。元明清を通じて、漢民族移民の増大と歴代王朝の統治政策によって、より多くの非漢族が中央政府に直接支配されるようになり、そのことによって民族移動が激しくなり、非漢族の土着社会に大きな変容が起こり、東南アジア大陸部へ移住する非漢族も出現した。だが、従来この歴史過程を総合的に分析する研究は僅少であった。

本プロジェクトの目的は、(1) 西南中国非漢族の歴史に関する研究発表、(2) 史(資)料の発掘・収集・整理を行うことによって、従来注目されることのなかったこの地域の歴史に対する研究を促進することにある。なお、方法論として非漢族を主体とした分析視点を重視すると同時に、歴史学者以外に文化人類学、民族学、民俗学、言語学

などの専門家の参加によって学際的なアプローチの構築を目指す。

井上 徹	上田 信	菊池秀明	岸本美緒	末成道男
武内房司	多田狷介	谷口房男	張 士陽	塚田誠之
寺田浩明	林謙一郎	吉野 晃	渡部 武	

東アジアの社会変容と国際環境 (中見立夫) (所員 5 名, 共同研究員 28 名)

近年における国際情勢の変化と学术交流の発展によってわれわれ歴史学研究者は東アジア各地域の文書館・図書館などに所蔵される一次資料に対し、以前とは比べられないほど容易に、接近できるようになった。さらに、現地学界でも、あたらな歴史評価・研究動向がおこり、われわれの研究への刺激となっている。ただ対象とすべき史料の量があまりに膨大で、その実態を体系的に把握してはいない。

また、個別の研究が深化するとともに、より大きな視野のもとに、問題をとらえなおし、分析枠組みを再検討することも必要である。さらに海外学界との共同研究、史料調査も、双方にとって、より具体的で実りの多い形で推進しなければならない。

本プロジェクトでは、このような研究状況を念頭におきながら、18世紀から20世紀初頭の東アジア世界各地における社会の変容が、外部世界とどのように有機的に関連していたかという問題を中心にすえ、文書史料によりそれがどこまであきらかにできるか検討する。東アジアに関する史料と研究情報の開かれたフォーラムをめざしている。

毎回テーマをかえながら、海外からのゲスト・スピーカーもまじえ、シンポジウム形式で研究会を開催し、また『東アジア史資料叢刊』などの出版物も刊行している。

赤嶺 守	石井 明	石浜裕美子	伊藤秀一	井村哲郎
江夏由樹	岡 洋樹	尾形洋一	小野和子	笠原十九司
加藤直人	岸本美緒	楠本賢道	佐々木揚	邵 建国
坪井善明	中村 義	西村成雄	荻原 守	浜下武志
原 暉之	藤井昇三	細谷良夫	松重充浩	毛里和子
森川哲雄	森山茂徳	柳澤 明		

中央アジアにおける「民族」の創出に関する総合的研究 (新免 康)

(所員 2 名, 共同研究員 16 名)

近年、ソ連の崩壊に伴う各「民族」共和国の独立や、中国の開放政策による新疆ウイグル自治区(東トルキスタン)の「発展」など、中央アジア地域が大きく変動している。そのなかで注目されるのは、「民族」文化の強調とイスラームの「復興」が顕著なことである。「民族」の文化的「伝統」や「歴史」の再発見、もしくは創造と言えるような局面さえ見いだせる。

このような動向にはソ連支配の消滅や中国における民族政策の緩和に基づいた新規の аспекトという側面がある。しかしその「民族文化」なるものを特徴づける枠組み自

体は、むしろソ連時代に成型された歴史的産物なのである。近代以前の中央アジアは、ペルシア語・文化と重層する形で、共通の文化的基礎としてトルコ・イスラーム文化の広がりをもつとともに、オアシス定住民諸集団・遊牧民諸集団の交錯する複合社会を形成していたと思われる。しかし、18～19世紀に「異民族」・「異教徒」による支配に組み込まれ、さらに20世紀には、ソ連における「民族的境界画定」や、新疆における「民族」の規定を通じて、人為的な「民族」的枠組みが創出されていった。各「民族語」の成立もその一環と言える。これにより現在に至るまで様々なレベルにおける軋轢や矛盾が生じたが、その一方でこのような分断的な枠組みが次第に定着し、新しい文化の生成を促していったことも否定できない。

そこで本プロジェクトでは、中央アジアが前近代から現在へと辿った歴史過程と現状に関して、基層文化の実態、「近代化」の進展、各国家体制における政治的状況、などとの関連を視野に入れつつ、「民族」的枠組の創出とそれに伴う社会・文化の再構成のダイナミズムを軸に多角的に検討を加えていく。

梅村 坦	宇山智彦	王 建新	帯谷知可	川口琢司
久保一之	小松久男	坂井弘紀	真田 安	澤田 稔
菅原 睦	菅原 純	濱田正美	堀 直	堀川 徹
山内昌之				

African Linguistic Perspective : A Working Group (松下周二)

(所員 4 名, 共同研究員 15 名)

多様性と混沌、それにどうしようもないほど複雑な分布を示すアフリカの言語を、アジアやヨーロッパの視点からではなく、アフリカそのものの視点から観察し、素直に驚愕する研究グループです。

代理言語、音楽のファンクション、言語遊戯などのサブテーマも、忘れずに取り扱います。

小森淳子	桜井 隆	清水紀佳	ジョン・フィリップス	
砂野幸稔	竹村景子	中川 裕	中島 久	西江雅之
稗田 乃	日野舜也	宮本正興	宮本律子	守野庸雄
湯川恭敏				

イスラム圏における異文化接触のメカニズム—人間動態と情報に関する総合的研究 (家島彦一)

(所員 6 名, 共同研究員 39 名)

(目的)

過去5年間にわたる研究プロジェクト「市の比較研究」と国際学術研究「イスラム圏における市の比較研究」(平成元年～平成3年実施)の成果をふまえて、人間動態のダイナミズムとそれにともなう言語文化接触の諸態様を総合的に分析・研究します。

最近の世界情勢を念頭に、国家体制の解体、社会経済の変動、民族・宗教対立などの状況と人間動態のあり方について、年2～3回の総合研究会と月1回程度の小研究会を行っています。

(研究の内容)

- ① 人間の地理的・社会的移動と言語・文化接触の流動現象 (mobility) を「人間動態」としてとらえる。
- ② 人間動態の諸要因およびその動態と影響について言語学・歴史学・人類学・地理学などの諸分野から学際的に分析・研究する。
- ③ 人間動態にともなっておこる言語文化適合 (不適合) に関する事例研究
- ④ 複数の言語圏を統合するような共通言語の機能、複数の文化圏の基底に共通して存在する物質・生活複合や社会・文化共生の諸側面について検討する。
- ⑤ 人間や情報の移動を支えるような受け渡しシステム、あるいは社会の中で情報やモノの交換・接続の役割を果たす要素についての比較研究を行う。
- ⑥ プロジェクト研究会と連動して、国際学術研究「イスラム圏における人間移動と共生システムに関する調査研究」を実施している。(3年計画)
- ⑦ 研究プロジェクトは計6ヶ年にわたって継続する予定である。

赤堀雅幸	新井政美	医王秀行	太田敬子	大塚和夫
大月康弘	奥田 敦	片倉もとこ	加納弘勝	川瀬豊子
私市正年	北川誠一	小林春夫	小松久男	佐藤幸男
佐原徹哉	清水宏祐	清水美穂	ジョン・フィリップス	
新谷英治	鈴木 均	鷹木恵子	高階美行	高山 博
店田廣文	柘植洋一	寺島憲治	戸谷 浩	中川聡史
永田雄三	西尾哲夫	長谷部史彦	羽田 正	濱田正美
原 隆一	堀内正樹	松田俊道	松原正毅	三木 亘



1990年5月27日、韓国全羅北道淳昌郡回文山にて、更定儒道の道人(信者)の子供たちを写す。土着主義的な宗教運動である更定儒道の道人たちは、西洋的な生活様式が浸透した現代韓国においても、伝統的なライフスタイルを堅持している点で知られている。

(本田 洋)

国際シンポジウム

「東南アジアにおける人の移動と文化の創造」

(Human Flow and Emergence of New Cultures in Southeast Asia)

1996年12月3日～5日

シンポジウムの目的と内容

文明論的に見て、東南アジアに対しては、古くは中国とインドの、時代が下ってからはイスラム圏とヨーロッパの通過路という位置づけが成されてきました。しかし、近年の研究では、この地域・海域において、「大文明」とは関わりなく、地域的な人の移動が盛んであったことが、指摘されつつあります。人の移動は他からの強制によって生じることもあれば自発的に行われることもあり、一時的な移動も定住もあり、また定住先で新しいコミュニティを形成することもあれば、先住の人々に同化するなど、種々の相を示します。このような人の移動は現在なお続いており、それが国家間の問題に発展することすら珍しくありません。ある場合にはそれは内政・外交面でのウィークポイントとなるものですが、常にそれをマイナス要因としてのみとらえるのは当たらないでしょう。

本シンポジウムは、アセアン諸国をはじめとする東南アジア諸国の社会学者、およびこの地域において現地調査を行ってきた海外及び日本の研究者を招請して、これまでの東南アジアの諸地域文化の形成過程を人の移動という視点から捉え直し、さらに、現地調査などにおいて得られた人の移動の動向をもとに、現在形成されつつある新たな文化の像を描き出そうというものです。近年のアセアン諸国などにおける高度経済成長に裏打ちされた自信が、これまでの西欧的価値観とは異なる新しい価値観への積極的肯定をこれらの地域の人々にもたらしつつあり、今後これらの地域で創造された文化は、世界に対してインパクトを与える存在になることが考えられます。今後の世界が多文化状況を現出させていくにせよ、国際文化が形成されていくにせよ、このような視点は文化のあり方を考える上でますます重要になってくると言えましょう。

なお、本シンポジウムは文部省 COE プログラムの一環として開催されます。また、共同研究プロジェクト「東南アジアにおける人の移動と文化の創造」を母体とし、それと連動したかたちで開催されます。

国際学術交流

外国人研究者の招聘

本研究所は、国際的な学術交流・共同研究を推進するために、外国からアジア・アフリカの言語文化の専門家を外国人研究者として受け入れ、研究の便宜を供与しています。比較言語文化論研究部門ならびに言語文化情報研究部門の情報開発分野は、外国人研究者を客員として受け入れるためのポストです。このほか日本学術振興会や国際交流基金の招聘計画などで来日する外国人研究者を、随時受け入れています。この3年間に外国から受け入れた研究者は以下のとおりです。

1994	M. G. S Narayanan	インド	歴史学
	Chob Kacha-ananda	タイ	文化人類学, 民族学(タイの山地民族, 特にヤオ族について)
	Daniel Joseph Mkude	タンザニア	言語学(一般言語学, スワヒリ語学)
	Bando Bhimaji Rajapurohit	インド	言語学, 音声学
	Ram Adhar Singh	インド	比較言語学(インド・アールリア諸語), 辞書編纂学
	Lydia N. Yu-Jose	フィリピン	国際関係論
	Askari Pashai	イラン	政治学, 教育学
1995	Doan Thien Thuat	ベトナム	言語学
	尹紹亭	中国	文化人類学
	Austin Peter Kenneth	オーストラリア	言語学
	Annamalai Elayaperumal	インド	言語学
	Wazir Jahan Karim	マレーシア	社会人類学
	Haryo Suhardi Martodirdjo	インドネシア	社会人類学
	Akhundov Agamusa	アゼルバイジャン	言語学
	Trias i valls Maria Angels	スペイン	社会人類学
1996	方素梅	中国	中国少数民族史
	Trias i valls Maria Angels	スペイン	社会人類学
	李範文	中国	言語学(西夏語)
	Sudhir Chandra	インド	思想史
	ALDO TOLLINI	イタリア	言語学
	林美容	台湾	文化人類学, 台湾・中国・シンガポール研究
	Moeljarto Tjokrowinoto	インドネシア	開発理論・開発政策論
	Evelyn Tan Cullamar	フィリピン	フィリピン学・国際関係論
	Vladimir Leonidovich Uspensky	ロシア連邦	内陸アジア史・文献学
	Didier Domolin	ベルギー	言語学・民族音楽学
Elena Nikolaevna Uspenskaya	ロシア連邦	文化人類学・南アジア研究	
Tsedendambyn Batbayar	モンゴル	国際関係論・歴史学	
Sumru Ozsoy	トルコ共和国	言語学	

外国研究機関との共同研究

本研究所は、かねてより海外の研究機関と研究資料・情報の交換、研究員の相互交流、共同研究調査の実施等を通じ学問上の国際協力を進めてきましたが、最近はさらにこれらの機関のいくつかと正式に学術協定を結び、国際協力の一層の充実をはかろうとしています。

これまでに学術協定を結んだ研究機関名と締結年および共同で実施した事業等は、以下の通りです。

外国機関名 (略号)	締結年	国名
国立科学技術研究機構 (ONAREST) 1978年 (現・高等教育・情報科学・科学研究省(MESIRES))		カメルーン
1969年から1976年の文部省科学研究費補助金による現地調査「アフリカ部族社会の比較調査」(研究代表者・富川盛道教授)におけるカメルーンとの共同研究にさいして、双方において、研究協力協定の必要性が認識され、1978年9月、カメルーン国立科学技術研究機構の人文科学研究所所長、Samuel Ndoumbe-Manga氏をまねき、本研究所において協定が締結された。		
協定締結後の共同研究、所員の現地における共同研究(1980-81, 82, 84, 86):カメルーン研究者の現地調査参加(1982, 84, 86, 87, 89, 90, 91):本研究所におけるカメルーン研究者の成果刊行、単行本8冊(<i>African Languages and Ethnography</i> シリーズ), 論文1点(Sudan Sahel Studies)。		
インド諸語中央研究所 (CIIL)	1987年	インド
CIIL 所長本研究所訪問(1983), 副所長来訪(1985), 所員来所, 共同研究(1984-85, 1991-92):本研究所所員 CIIL 訪問(1982, 87, 88, 89, 91, 92):共同研究プロジェクト「南アジア諸言語の研究とそのデータベースの作成」を実施, 共同研究年次報告書発行(1990, 91, 92)。		
インド統計研究所 (ISI)	1987年	インド
ISI 特別客員研究員本研究所来所, 共同研究(1985-86), 経済研究部長来訪(1988):本研究所所員 ISI 訪問(1987, 88, 89, 90, 91):共同研究プロジェクト「電算機補助によるラビンドラナート・タゴールの言語の分析的研究」を実施中(1987-):電算資料シリーズ3冊発行(1987, 88, 90)。		
チベット言語文化研究所 (LCAT)	1988年	フランス
敦煌の古代チベット語文献のデータベース化をおこなっているが、その一部の KWIC 索引は、 <i>Choix de Documents Tibétains à la Bibliothèque Nationale III Corpus Syllabique</i> として、フランス国立図書館から1990年に出版された。		
人文科学研究所 (ISH)	1990年	マリ
文部省科学研究費補助金による現地調査「ニジェール川大湾曲部諸文化の生態学的基盤および共生関係の文化人類学的研究」を継続的に実施し、その成果を <i>Boucle du Niger : Approches multidisciplinaires</i> Vol. 1. (1988), Vol. 2. (1990), Vol. 3. (1992) として刊行した。		

国 際 学 術 研 究

本研究所は、その性格上、アジア・アフリカの現地調査をおこなうことを、重要な研究課題の一つにしています。過去5年間に、文部省科学研究費補助金（国際学術研究）で、本研究所員が組織した研究は以下のとおりです。

- 1) ニジェール川大湾曲部諸文化の生態学的基盤および共生関係の文化人類学的研究
1992年, 1993年 (川田順造)
- 2) アフリカにおける都市化の比較調査—とくに、地域形成・国民社会形成との係わりにおいて—
1991年 (日野舜也)
- 3) イスラム圏における市の比較研究—異文化接触のメカニズム—
1991年 (永田雄三)
- 4) 中国周辺部における言語接触と社会文化変容—漢族文化と非漢族文化との相互関係—
1991年, 1992年 (中嶋幹起)
- 5) 電算機補助による南アジア諸言語の研究
1991年, 1992年 (奈良 毅)
- 6) 多民族国家マレーシアにおける「共同体」の総合的研究
1991年, 1992年 (宮崎恒二)
- 7) アフリカにおける伝統都市の社会変化の比較調査
1993年, 1994年 (日野舜也)
- 8) 電算機補助による南アジア諸言語の比較・対照研究
1993年, 1994年 (奈良 毅)
- 9) アフリカにおける「音文化」の比較研究
1994年, 1995年, 1996年 (川田順造)
- 10) 東アジアにおける情報伝達と人間移動—南北の比較研究—
1994年, 1995年, 1996年 (中嶋幹起)
- 11) 南部アフリカ地域の諸言語の言語学的記述・比較研究
1994年, 1995年, 1996年 (加賀谷良平)
- 12) イスラム圏における人間移動と共生システムに関する調査研究
1994年, 1995年, 1996年 (家島彦一)
- 13) アラブ遊牧民の移動と環境適応メカニズムの研究—「水」が創る文化と社会—
1995年 (西尾哲夫)
- 14) シャン文化圏における言語学的・文化人類学的調査
1996年 (新谷忠彦)

なお、このほか各種財団の助成金による海外学術調査も組織されています。「海上ルートを通じた東西の文化的・経済的交流—インド洋周辺の港市遺跡の調査—」(研究代表者・家島彦一, 1984-85), 「フィリピン・フォークカトリシズムの歴史人類学的研究」(研究代表者・池端雪浦, 1984-87) などがその一部です。

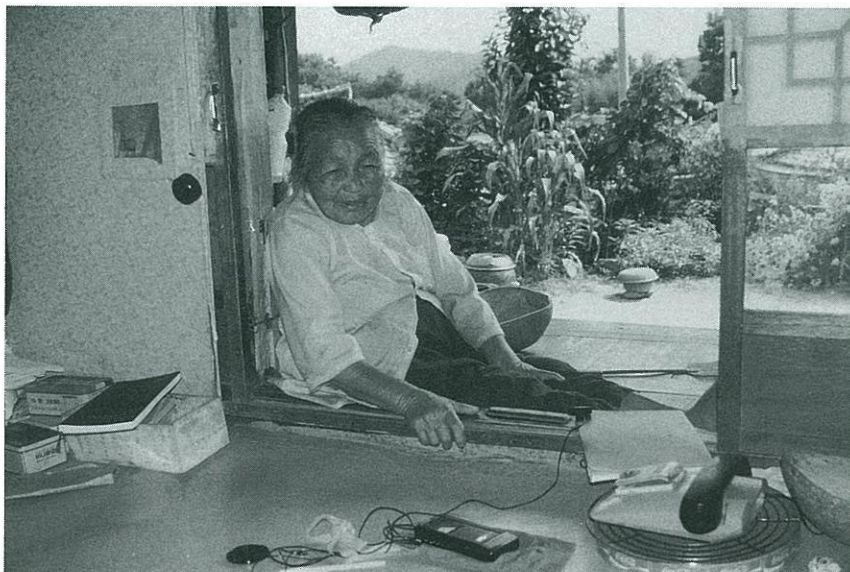
「国際学術研究に関する総合調査研究」(通称「国際学術研究総括班」)の活動

このほかに文部省科学研究費補助金（国際学術研究）を受けている「総括班」は、本研究所所長を代表者とし、他の様々な機関に所属する研究者によって組織され、本研究所に事務局をおいて、科学研究費（国際学術研究）にかかわる研究者・研究組織相互間、および研究者側と文部省の間の情報交換、連絡調整などの活動をおこなっています。活動の主なものとしては、科研費（国際学術研究）で海外に派遣される研究組織の代表者を集めて情報交換をおこなう「研究連絡会」の開催や国際情勢に即応した研究調査を可能にするための「学術研究体制調査のための海外派遣」および『海外学術調査ニュースレター』（年3回）の出版があります。

長期研究者派遣

アジア・アフリカの言語文化の研究にとって、各地域で話されているさまざまな言語の修得が必須であることは言うまでもありません。本研究所では助手等の若い研究者をそれぞれ2年の期間、アジア・アフリカの諸国に派遣しています。この現地投入は、言語を自由に話し、あるいは読み、書く能力を獲得するだけでなく、長期間現地の生活にとけこむことによって、その地域の文化や歴史の研究に対する幅広い視点を身につけることを目的としています。この計画は1967年から実施され、現在までに合計30名が派遣されました。

- 1967年—1969年 石垣幸雄 (エチオピア), 守野庸雄 (タンザニア)
1969年—1971年 松下周二 (ナイジェリア), 家島彦一 (アラブ連合)
1971年—1973年 内藤雅雄 (インド), 中野暁雄 (モロッコ, 南イエメン)
1973年—1975年 福井勝義 (ソマリア), 中嶋幹起 (香港)
1975年—1977年 加賀谷良平 (ボツワナ), 湯川恭敏 (タンザニア, ザイール)
1977年—1979年 石井 溥 (ネパール), 藪 司郎 (ビルマ)
1979年—1981年 羽田亨一 (イラン, トルコ), 清水宏祐 (アラブ連合, イラン, トルコ)
1981年—1983年 山本勇次 (ネパール), 新谷忠彦 (ニューカレドニア)
1983年—1985年 辻 伸久 (中国, 香港), 水島 司 (インド)
1985年—1987年 中見立夫 (中国, モンゴル), 梶 茂樹 (ザイール, ケニア, ザンビア)
1987年—1989年 松村一登 (フィンランド, ソ連), 宮崎恒二 (オランダ, インドネシア)
1989年—1991年 林 徹 (中国, トルコ), 栗本英世 (エチオピア, ケニア)
1991年—1993年 栗原浩英 (ベトナム, ロシア), 峰岸真琴 (インド)
1993年—1995年 新免 康 (中国, 独立国家共同体, イギリス), 根本 敬 (イギリス, タイ)
1995年—1997年 飯塚正人 (エジプト, イギリス), 黒木英充 (シリア, フランス)



1990年7月、韓国全羅北道南原郡の農村にて。ハルモニ（おばあさん）がマル（縁側）に座って昔話を語っている。左のノートは彼女の備忘録。ちなみに録音機は調査者のもの。
(本田 洋)

短期共同研究員（公募）

1978年度より、共同研究プロジェクトとは別に、本研究所において一定期間（2週間以上2ヶ月以内）研究をおこなう共同研究員を公募しています。

大学院地域文化研究科博士後期課程

東京外国語大学では、多元化した言語・文化・歴史・政治・経済などを統合し、かつ深く掘り下げうる教育者・研究者の育成という学術的な要請と、国際交流の高度化・複雑化に伴う高度な知識を有する国際的な人材や専門職員の需要に応ずるために、言語教育と地域研究をより高度に発達させた大学院地域文化研究科博士後期課程を平成4年度より設置しました。本研究所では教育体制のこうした発展に協力すべく、本研究所に大学院委員会を設置し、15名（平成8年度）の教官が参加し、言語学・民族学・文化人類学・歴史学などの分野における学生を受け入れ、教育活動に従事することとなりました。

研 究 生

大学卒業かそれと同等以上の学力がある者が研究所で研究に従事することを希望するときは、審査の上研究生として入所を許可します。

研究生は入所料及び研究料を納付し、指定の教官の指導を受けます。



街中を通過して、死者を埋葬する山へと向かう葬列。近年、韓国、特に都市部では、死者を埋葬地まで運ぶのにバス・自動車等の輸送手段を用いることが多くなっているが、このように昔ながらに葬列を組んで人力で運ぶこともある。1993年9月8日、韓国全羅北道南原市広寒楼脇にて写す。
(本田 洋)

言語研修

本研究所では、アジア・アフリカ地域の言語の修得のために、本研究所員を中心にその言語を母語とする人、および日本人研究者を講師として、毎年夏、言語研修を開講しています。開講する言語の数は、東京会場が2言語、関西会場が1言語、研修時間は150時間です。最近、言語研修を実施した言語は、次の通りです。(1996年実施決定を含む) 10頁参照

研修言語名(修了者数)

年度	東京会場	関西会場
1980	ネパール語(14), モンゴル語(14)	ベトナム語(5)
1981	ヒンディー語(8), パシュトー語(10)	中国語中級(26)
1982	アラビア語エジプト方言(12), ハンガリー語(17)	フルフルデ語(12)
1983	チベット語(12), フィンランド語(21)	パンジャーブ語(8)
1984	ピリピノ語(タガログ語)(12), ヨルバ語(3)	トルコ語(15)
1985	朝鮮語(14), カンボジア語(10)	スワヒリ語(8)
1986	西南官話(5), タミル語(12)	ベンガル語(8)
1987	中原官話(10), タイ語(19)	シンハラ語(8)
1988	ペルシア語(10), トルコ語(16)	インドネシア語(6)
1989	ベンガル語(20), ベトナム語(9)	アラビア語エジプト方言(15)
1990	朝鮮語(11), インドネシア語(11)	ペルシア語(14)
1991	エストニア語(12), ビルマ語(15)	中国語(13)
1992	ネパール語(12), アラビア語エジプト方言(15)	フィリピノ語(12)
1993	朝鮮語(17), グルジア語(17)	モンゴル語(17)
1994	ウォロフ語(9), ヒンディー語(11)	トルコ語(22)
1995	アムハラ語(5), チベット語(25)	上海語(12)
1996	タイ語(), 現代ヘブライ語()	ヨルバ語()

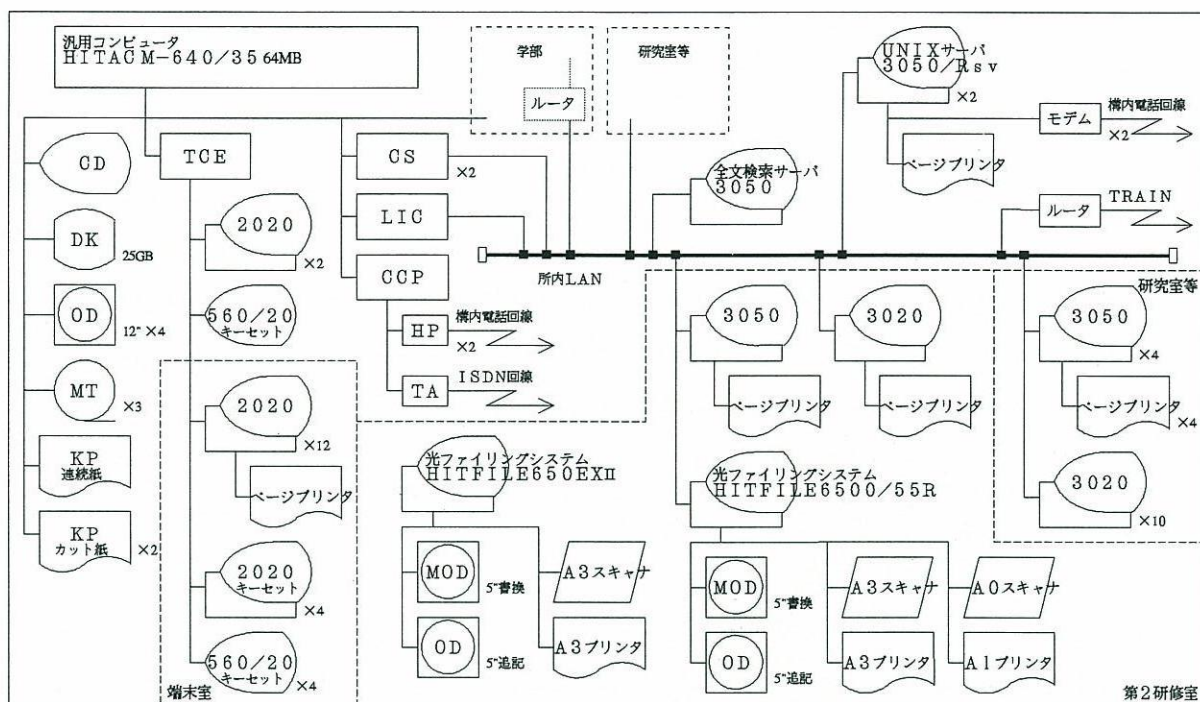
研修生(各言語約10名)は、大学など研究機関を通じて全国から公募します。受講を認められた者は入所料, 受講料を納付することになります。また, 課程を修了した人には審査のうえ修了書が授与されます。

上記の研修事業と関連して, より効果的で充実した研修方法を開発するための研究の一環として, 科学研究費補助金による支援を受けつつ, 言語研修において自動学習機器に合わせて機械化する部分をプログラム(CAI)化するための研究を実施しています。この研究によって開発した「CAIプログラム」は, 研修コースのなかで補助教材として活用することが期待されるばかりでなく, 必要に応じて希望する言語の学習をすすんで個人的に受講できるよう設営し, 増大し, 多様化する社会的要請に応えるようにすることを目指すものです。

施設

電算機室

システム構成図



1978年にメインフレーム・コンピュータを導入以来、何代かの世代交代を経て、現在は HITAC M-640 システムが主機となっています。ハードウェアの面からは、特別なものはありませんが、自然言語処理という唯一の目的に沿って、それに適した構成がなされています。

非ラテン・非漢字系の文字体系を扱うために、文字フォントの作成に始まり、テキストの入力システム、エディタ、レイアウト・プリントアウトなどの、基本となるユーティリティー・ソフトウェアが備えられています。ユーザーはこれらを利用して、インデックスの作成や辞典編纂、データベースの編成、テキスト分析などの処理をおこなうことができます。



図 書 室

日本における唯一の、大学付置の人文科学系共同利用研究所である本研究所は、アジア・アフリカ諸地域の言語文化に関する研究に必要な基礎資料を、1964年の（昭和39）創設以来収集してきました。

この間、民族の独立、対象地域の複合化、研究手段の高度化等、当該地域に関する研究の諸条件の変化は、近年とみに著しい。この現況を考慮しつつ、内外の研究機関、大学等より参集する共同研究員等の需要に応えるため、多様な資料を収集している。

また、海外研究機関（約50数ヶ国、220数機関）との寄贈・交換による資料をも継続的に収集しています。

1996年（平成8年）3月末現在、蔵書（備品資料）の総数は、85,020冊、マイクロフィルム・8,880リール、マイクロフィッシュ・27,686シート、雑誌は、約1,600タイトル等です。

蔵書のなかには、アジア・アフリカ等諸地域の教科書をはじめ、世界各国語の聖書、イランの主要新聞（19世紀末～1970年のマイクロフィルム：65種）、ベンガル語文芸雑誌（19世紀創刊：5種）のほか、オスマン語劇場ポスター、ナポレオン「エジプト誌：第2版」、19世紀「カイロ石版画集」、晩清（中国）製糖画集等々、他の研究機関には見られない特殊な資料が所蔵されています。

また外国雑誌の収集には、特に留意し、欠号補充等の努力を続けています。

なお、本研究所には現在、下記5種の文庫があります。

① **山本文庫**：1967年（昭和42）受入

著名な満洲語学者、故山本謙吾氏（1920～1965）の個人蔵書で、満洲語・ツングース語関係の諸文献を中心に言語学・音声学・アルタイ語学等に関する諸文献（和・洋書計598冊）を含む。

② **浅井文庫**：1970年（昭和45）受入

著名なオーストロアジア言語学者、故浅井恵倫氏（1895～1969）の蔵書。アジア・アフリカ諸言語の研究書・辞典類・雑誌等（和・洋書計870冊）をはじめ、高砂族関係の貴重な言語資料、ニューギニアの民族写真その他（アルバム、ノート、原稿、書簡、直筆辞書、単語カード、未発表の高砂族伝説集索引カード等）を含む。

③ **小林文庫**：1976年（昭和51）受入

著名なモンゴル史研究者である故小林高四郎氏（1905～1987）の個人蔵書で、モンゴル民族の生活と習俗に関する文献（和・洋書計1,671冊）を含む。

④ **前嶋文庫**：1986年（昭和61）受入

わが国におけるイスラム研究の創立者の一人である故前嶋信次氏（1903～1983）の個人蔵書のうち、和漢書1,272冊を受け入れたもの。イスラム関係のみならず、東洋史、東西交渉史、旅行記などを含む。

⑤ **王文庫**：1993年（平成5）受入

著名な台湾言語学者、故王育徳博士（1924～1985）の個人蔵書で、台湾の言語学、文学、歴史、政治関係の諸文献を中心にしたコレクションである。歌仔戯、1950年代から1980年代にかけて日本で展開された台湾独立運動家が発行した雑誌やパンフレット、台湾で発行された党外雑誌や王博士の手稿など貴重なものを多数含む。（和・中・洋書等計3,163点）。

音 声 学 実 験 室

音声学実験室には、音声言語の性質・特徴や発話の調音状態を観察し記録するために次のような機械が用意されています。

パーソナルコンピュータを用いた音声分析プログラムでは、音声の各時点ごとの構成周波数の変化や強さを濃淡模様で表示するスペクトログラムや基本周波数の抽出ができます。スペクトログラムでは、従来の機械式のそれと同様に、用途に応じてワイド・バンド、ナロー・バンド、セクション、音圧の表示ができるうえに、基本周波数を連続的にプロットして表示することもできます。基本周波数測定は、測定したい範囲を音声波形上に指定してもできますが、スペクトログラム上の範囲指定もできますので、基本周波数と音節との対応が容易になります。もちろん、各時点ごとの測定値も表示できます。画面の時間表示も自由に変えることができますので、数文にわたるピッチ変化のようなデータも、また音節内のピッチ変化のような詳細な測定を要するようなデータも画面に表示できます。1サンプルの最大録音時間はサンプリング周波数やコンピュータのメモリーによって異なりますが、現在のシステムでは10kHzを上限とする測定（20kHzサンプリング）のためのデータで、最大約10分間可能です。さらに、ある音声データを他の音声データの任意の部分に付加したり、またある音声データからその一部を切り取ったりすることも可能ですし、音声データの特定の部分のみを繰り返し聴取することもできます。

エレクトロ・パラトグラフは、舌の調音運動を観察し記録するための機器です。32個の微小な電極を埋めこんだ人工口蓋を発話者の口蓋にはめて、各時点ごとの電極と舌との接触状態を、全面パネルに口蓋状に配列したランプの点滅で示してくれます。もちろん、この点滅表示を特殊用紙に記録することもできます。

このほかに、ビデオテープ編集機やカセットテープを高速に複製するテープ・デュプリケーターが、フィールド調査で録音されたテープの複製作成や言語研修用テープの作成のために用意されています。また、良好な条件での発話資料を録音するために、防音室や各種のテープレコーダーも用意されています。

付属施設の音声・言語研修資料室には、フィールド調査で収集された世界の珍しい言語や貴重な民話、民族音楽などのテープやレコードをはじめ、これまでの言語研修テキストのテープ、アジア・アフリカ地域の諸言語の語学テープとレコードが整理・保管されていて、研究者の利用の便を計っています。

さらに、アジア・アフリカ地域のマルチ・データベースの作成が予定されています。これは、アジア・アフリカ地域の言語文化情報を、映像情報・音声情報・文字情報で提供するデータベースです。例えば、「スワヒリ語での挨拶は？」と尋ねますと、音声と文字による挨拶語とその説明に加え、挨拶時の仕草、表情、情感などを表した映像も同時に提供されます。

出版物一覽

下記の出版物は非売品ですが、著者あるいは編集出版委員会の承認により、研究機関、個人研究者に寄贈することができます。なお、*印のものは在庫がありません。

1. アジア・アフリカ言語文化研究. Journal of Asian and African Studies. Nos. *1(1968), *2(1969), *3(1970), *4(1971), *5(1972), *6(1973), *7, *8, *9(1974), *10(1975), *11, *12(1976), *13, 14(1977), 15, 16(1978), 17, 18(1979), 19, *20(1980), *21, *22(1981), *23, 24(1982), *25, *26(1983), *27, 28(1984), 29, *30(1985), 31, 32(1986), 33, 34(1987), 35, 36(1988), 37, 38(1989), 39, 40(1990), 41, 42(1991), 43, 44(1992), 45(1993), 46・47(創立30周年記念号1, 1994), 48・49(創立30周年記念号2, 1995), 50(1995)
2. アジア・アフリカ言語文化研究所 通信. Nos. 1-86(1966-1996).

アジア・アフリカ言語文化叢書 Study of Languages & Cultures of Asia & Africa, Monograph Series

1. 『タイ農民の生活』. ピア・アヌマーン・ラーチャトン: 河部利夫 (訳註). 1967.
- *2. 『イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記』. 家島彦一 (訳註). 1969.
3. *An Outline of Gwandara Phonemics and Gwandara-English Vocabulary*. MATSUSHITA, S. 1972.
4. *Conversational Texts in Eastern Neo-Aramaic (Gzira Dialect)*. NAKANO, A. 1973.
- *5. *Reconstruction of Proto-Tsounic Phonology*. TSUCHIDA, S. 1976.
- *6. *Muhsin-zâde Mehmed Paşa ve Âyânlık Müessesesi*. NAGATA, Y. 1976.
- *7. *A Chronicle of the Rasūlid Dynasty of Yemen; from the unique MS Paris No. Arabe 4609*. YAJIMA, H. 1976.
8. *A Provisional Classification of Tagalog Verbs*. McFARLAND, C. D. 1977.
9. *Northern Philippine Linguistic Geography*. McFARLAND, C. D. 1977.
10. *Phonology of Ancient Chinese, Vol.1*. HASHIMOTO, M. J. 1978/1984(repr.)
11. *Phonology of Ancient Chinese, Vol.2*. HASHIMOTO, M. J. 1979/1984(repr.)
12. *Genèse et évolution du système politique des Mosi méridionaux (Haute Volta)*. KAWADA, J. 1979.
13. *Patterns of Speaking in Pilipino Radio Dramas: A Sociolinguistic Analysis*. BAUTISTA, M. L. S. 1980.
14. 『ネワール村落の社会構造と其の変化; — カースト社会の変容 —』. 石井溥. 1980.
- *15. *A Linguistic Atlas of the Philippines*. McFARLAND, C. D. 1980.
16. *Elections in Panjab; 1920 - 1947*. YADAV, K. C. 1981.
17. *Teaching Foreign Languages to Arab Learners; Methods and Media*. EL-ARABY, S. A. 1983.
18. *Textes historiques oraux des Mosi méridionaux (Burkina-Faso)*. KAWADA, J. 1985.
- *19. *Nattar and the Socio-Economic Change in South India in the 18th-19th Centuries*. MIZUSHIMA, T. 1986.
20. 『湘方言調査報告 上冊』. 中嶋幹起. 1987.
21. *Japonya'nin çin Halk Cumhuriyeti'ne Karşı Politikası (1952-1978)*. TUNCOKU, A. M. 1987.
22. *The History and Development of Tonal Systems and Tone Alternations in South China*. BALLARD, W. L. 1988.
- *23. *Indigenous Psychology and National Consciousness*. ENRIQUEZ, V. G. 1989.
24. 『湘方言調査報告 下冊』. 中嶋幹起. 1990.
25. *Paribar and Kinship in a Moslem Rural Village in East Pakistan*. HARA, T. 1991.
26. *Nâsureddîn Şah Zamanında Osmanlı-İran Münasebetleri (1848-1896)*. NASİRİ, M. R. 1991.
27. *Textes en Nráa Drùbea*. SHINTANI, T. (et als.) 1992.
28. 『電腦處理 御製増訂清文鑑 第一冊』. 中嶋幹起 (編). 1993.
29. 『モン語辞典』. 坂本恭章. 1993.
30. 『電腦處理 御製増訂清文鑑 第二冊』. 中嶋幹起 (編). 1994.
31. 『表象のオリエント — 19世紀西洋人旅行者の中東像 —』. 高知尾仁. 1994.
32. 『日本語-モン語辞典』. 坂本恭章. 1995.

1. 『満州語口語基礎語彙集』. 山本謙吾. 1969.
- *2. 『現代朝鮮語基礎語彙集』. 梅田博之. 1971.
- *3. 『客家語基礎語彙集』. 橋本萬太郎. 1972/索引 1973.
4. 『イラク語基礎語彙集』. 和田正平. 1973.
5. *A Basic Clause Dictionary; Geez, Tigrinya, Amharic, Somali, Swahili*. ISHIGAKI, Y. 1974.
6. 『スワヒリ語基礎語彙用例集』. 守野庸雄. 1975.
7. 『モン語語彙集』. 坂本恭章. 1976.
8. 『閩語東山島方言基礎語彙集』. 中嶋幹起. 1977/日本語索引 1977.
9. *Avahattha and Comparative Vocabulary of New Indo-Aryan Languages*. NARA, T. 1979.
10. 『福建漢語方言基礎語彙集』. 中嶋幹起. 1979.
11. *The Be Language; A Classified Lexicon of Its Limkow Dialect*. HASHIMOTO, M. J. 1980.
12. 『ラデ語 — ベトナム語 — 日本語 語彙』. 新谷忠彦. 1981.
- *13. 『アツィ語基礎語彙集』. 藪司郎. 1982.
14. 『浙南呉語基礎語彙集』. 中嶋幹起. 1983.
15. 『サンバー語語彙集』. 湯川恭敏. 1984.
16. *Lexique Tembo I; Tembo-Swahili du Zaïre-Japonais-Français*. KAJI, S. 1986.
17. 『湖南省南部中国語方言語彙集; — 嘉禾県龍潭墟口語の分類資料 —』. 辻伸久. 1987.
18. 『納西語料; 故橋本萬太郎教授による調査資料』. 橋本萬太郎. 1988.
19. 『山東方言基礎語彙集』. 中嶋幹起. 1989.
20. 『海南島門語』. 新谷忠彦, 揚昭. 1990.
21. 『スワヒリ語辞典 A-C』. 守野庸雄, 中島久 (編). 1990.
22. 『ハウサ語ソコト方言』. 松下周二. 1991.
23. 『スワヒリ語辞典 第2集; D-J』. 守野庸雄, 中島久 (編). 1991.
24. 『フンデ語語彙集』. 梶茂樹. 1992.
25. 『スワヒリ語辞典 第3集; K-L』. 守野庸雄, 中島久 (編). 1993.
26. *A Classified Vocabulary of the Sandawe Language*. KAGAYA, R. 1993.
27. *The Arabic Dialect of Qift (Upper Egypt); Grammar and Classified Vocabulary*. NISHIO, T. 1994.
28. 『コンピューターによる北京口語語彙の研究 第一冊 資料編』. 中嶋幹起. 1995.
29. 『スワヒリ語辞典 第4集; M』. 守野庸雄, 中島久 (編). 1995.
30. 『スワヒリ語辞典 第5集; N-S』. 守野庸雄, 中島久 (編). 1996.
31. 『現代ウイグル語ウルムチ方言語彙集』. 林徹. 1996.

言語研修テキスト

- *1. 『チベット語』(全5冊). 北村甫ほか (編). 1974.
- *2. 『朝鮮語』(全3冊). 梅田博之ほか (編). 1974.
- *3. 『カンボジア語』(全5冊). 坂本恭章ほか (編). 1975.
- *4. 『ベンガル語』(全1冊). 奈良毅 (編). 1975.
- *5. 『ビルマ語』(全5冊). 大野徹ほか (編). 1976.
- *6. 『ペルシア語』(全3冊). 上岡弘二ほか (編). 1976.
- *7. 『スワヒリ語』(全2冊). 守野庸雄ほか (編). 1976.
- *8. 『広東語』(全4冊). 中嶋幹起ほか (編). 1977.
- *9. 『マラーティー語』(全3冊). 内藤雅雄ほか (編). 1977.
- *10. 『モンゴル語』(全4冊). 荒井伸一ほか (編). 1977.
- *11. 『トルコ語』(全3冊). 永田雄三ほか (編). 1978.
- *12. 『タイ語』(全2冊). 坂本恭章ほか (編). 1978.
- *13. 『ペルシア語』(全3冊). 勝藤猛ほか (編). 1978.
- *14. 『ハウサ語』(全3冊). 松下周二ほか (編). 1979.
- *15. 『ビルマ語』(全3冊). 藪司郎 (編). 1979.
- *16. 『ネパール語』(全3冊). 石井溥ほか (編). 1980.
- *17. 『モンゴル語』(全2冊). 小沢重男ほか (編). 1980.
- *18. 『ベトナム語』(全4冊). 川本邦衛ほか (編). 1980.
- *19. 『中国語』(全1冊). 大河内康憲 (編). 1981.
- *20. 『ヒンディー語』(全3冊). 田中敏雄ほか (編). 1981.
- *21. 『バシュトー語』(全3冊). 縄田鉄男 (編). 1981.
- *22. 『アラビア語』(全2冊). 中野暁雄, サラーフ・アル・アラビイ (編). 1982.
- *23. 『ハンガリー語』(全2冊). 岩崎悦子ほか (編). 1982.
- *24. 『チベット語』(全3冊). 北村甫ほか (編). 1983.
- *25. 『フィンランド語』(全3冊). 松村一登ほか (編). 1983.
26. 『バンジャープ語』(全3冊). 溝上富夫 (編). 1983.
- *27. 『ビリビノ語』(全2冊). 池端雪浦, リリア・アントニオ (編). 1984.
28. 『ヨルバ語』(全2冊). 清水紀佳ほか (編). 1984.
- *29. 『トルコ語』(全3冊). 勝田茂 (編). 1984.
- *30. 『朝鮮語』(全3冊). 大江孝男 (編). 1985.
31. 『カンボジア語』(全4冊). 坂本恭章ほか (編). 1985.
- *32. 『スワヒリ語』(全5冊). 宮本正興ほか (編). 1985.
33. 『西南官話』(全2冊). 橋本萬太郎, 馬真ほか (編). 1986.
34. 『タミル語』(全2冊). 山下博司ほか (編). 1986.
35. 『ベンガル語』(全3冊). 溝上富夫ほか (編). 1986.
- *36. 『タイ語』(全4冊). 森幹男ほか (編). 1987.
37. 『シンハラ語』(全3冊). 中村尚司ほか (編). 1987.
38. 『中原官話』(全1冊). 中嶋幹起, 賀巍ほか (編). 1987.
- *39. 『インドネシア語』(全3冊). 森村蕃ほか (編). 1988.
- *40. 『ペルシア語』(全4冊). 上岡弘二ほか (編). 1988.
- *41. 『トルコ語』(全4冊). 林徹ほか (編). 1988.

42. 『ベンガル語』(全1冊). 奈良毅(編). 1989.
43. 『ベトナム語』(全2冊). 栗本浩英ほか(編). 1989.
44. 『アラビア語(エジプト方言)』(全2冊). 藤井省吾ほか(編). 1989.
- *45. 『朝鮮語』(全3冊). 大江孝男(編). 1990.
- *46. 『インドネシア語』(全3冊). 宮崎恒二ほか(編). 1990.
- *47. 『ペルシア語』(全4冊). 岡崎正孝, ハーシエム・ラジャブザーデ(編). 1990.
- *48. 『エストニア語』(全2冊). 松村一登(編). 1991.
49. 『ビルマ語』(全3冊). 根本敬ほか(編). 1991.
- *50. 『中国語』(全4冊). 杉村博文, 古川裕(編). 1991.
- *51. 『アラビア語(エジプト方言)』(全2冊). 西尾哲夫ほか(編). 1992.
- *52. 『ネパール語』(全3冊). 石井溥ほか(編). 1992.
- *53. 『フィリピン語』(全3冊). ウィルフレド・ムヤルガス, 大上正直, 津田守(編). 1992.
54. 『朝鮮語』(全1冊). 梅田博之(編). 1993.
55. 『グルジア語』(全2冊). 木下宗篤ほか(編). 1993.
- *56. 『モンゴル語』(全3冊). 橋本勝ほか(編). 1993.
57. 『ウォロフ語』(全3冊). ジャン＝レオポルド・ジュフ, 梶茂樹, 砂野幸稔(編). 1994.
- *58. 『ヒンディー語』(全3冊). 町田和彦(編). 1994.
- *59. 『トルコ語』(全3冊). 勝田茂, 大澤孝ほか(編). 1994.
60. 『アムハラ語』(全4冊). 中野暁雄, ティラフン・テゲンほか(編). 1995.
61. 『チベット語』(全3冊). 星実千代, 星泉(編). 1995.
62. 『上海語』(全3冊). 方経民, 徐子亮, 鄭麗芸. 1995.
- 資料1. 『スワヒリ語(三日坊主コース)テキスト』(全1冊). 守野庸雄(編). 1985.

特定研究「言語」出版物

「文字と言語」研究資料 Writing and Language, Reference Materials

- *1. *hP'ags-pa Chinese*. HASHIMOTO, M. J. 1978.
2. 『東干語文字の音表化 — 資料集 —』. 橋本萬太郎(編). 1978.
- *3. 『ラテン化新文字 — 資料集 —』. 橋本萬太郎(編). 1978.
4. 『現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集(I)』. 川本邦衛. 1979.
5. *The Lu-Feng Dialect of Hakka*. SCHAANK, Simon H. 1979.
6. 『蘭学における訳語の考察』. 吉田忠. 1980.
7. 『現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集(II)』. 川本邦衛. 1980.

「AA 諸言語と日本語の学習」資料

- *77-1. 『基本動詞対照用例集; 日本語—朝鮮語1』. 梅田博之. 1978.
- *77-2. 『基本動詞対照用例集; 日本語—中国語1』. 大河内康憲. 1978.
- *77-3. 『基本動詞対照用例集; 日本語—タイ語1』. 坂本恭章. 1978.
- *78-1. 『基本動詞対照用例集; 日本語—朝鮮語2』. 梅田博之. 1979.
- *78-2. 『基本動詞対照用例集; 日本語—中国語2』. 大河内康憲. 1979.
- *78-5. 『基本動詞対照用例集; 日本語—ヒンディー語1』. 奈良毅. 1979.
- *78-6. 『基本動詞対照用例集; 日本語—アラビア語1』. 内記良一. 1979.
- *78-7. 『基本動詞対照用例集; 日本語—スワヒリ語1』. 守野庸雄. 1979.
- 78-8. 『助詞対照用例集1: 「の」日本語—AA 諸言語』. 梅田博之ほか. 1979.
- *79-1a. 『日本語の発音(朝鮮語を母語とする学習者のための日本語発音教材試案)』. 梅田博之, 村崎恭子. 1980.
- *79-1b. 『日本語のパラトグラム』(『日本語の発音』別冊). 梅田博之, 朴恵淑. 1980.
- *79-3. 『基本動詞対照用例集; 日本語—タイ語2』. 坂本恭章. 1980.
- *79-5. 『基本動詞対照用例集; 日本語—ヒンディー語2』. 奈良毅. 1979.
- 79-6. 『基本動詞対照用例集; 日本語—アラビア語2』. 内記良一. 1980.
- *79-7. 『基本動詞対照用例集; 日本語—スワヒリ語2』. 守野庸雄. 1980.
- 79-8. 『AA 諸言語教育基本語彙表(入門期の学習に必要な基礎語彙600項目試案)』. 梅田博之ほか. 1980.

共同研究報告

1. 『アジア・アフリカ諸国における国語教育資料の調査研究 — 中間報告 —』. 河部利夫(編). 1966.
2. 『アジア・アフリカ諸国国語教育資料目録』. 1967.
3. 『アジア・アフリカ言語調査票』上(1966), *下(1967).

4. 『「イスラム化」に関する共同研究報告』・*(1968), *続(1969), *3(1970), *4(1971), *5(1972), *6(1973), 『アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究』・7(1983), 8・9(1986).
5. 『現代インド・パキスタン文学研究』・I(1970), II(1971), III(1972).
- *6. 『「アジア・アフリカにおける宗教運動」共同研究報告』・*I(1972), *II(1972), *III(1973).
7. アジア・アフリカ文法研究. Nos. 1(1972), 2(1973), 3(1974), 4(1975), 5(1976), 6(1977), 7(1978), 8(1979), 9(1980), 10(1981), 11(1982), 12(1983), 13(1984), 14(1985), 15(1986), 16(1987), 17(1988), 18(1989), 19(1990), 20(1991), 21(1992), 22(1993), 23(1994), 24(1995).
- *8. 『トルコ民族とイスラムに関する共同研究報告』・1974.
- *9. *Oceanic Studies — Linguistics, Anthropology & Sociology, No.1.* 1976.
10. 『アフリカ社会の形成と展開; 地域・都市・言語』・富川盛道(編). 1980.
11. 『第三世界の文化研究 1; インド・マンガの世界観序論』・原忠彦. 1988.
- *12. 『東アジア史資料叢刊 第一輯; 一九世紀末におけるロシアと中国; — 『クラスヌィ・アルヒーフ』所収史資料より』・佐々木揚(編訳). 1993.
13. *Perspective on Chinese Society — Views from Japan.* SUENARI, M., EADES, J. S. and DANIELS, C. 1994.
14. *History and Society in South India.* MIZUSHIMA, T. and YANAGISAWA, H. (eds.) 1996.

Asian and African Grammatical Manuals (アジア・アフリカ文法便覧)

- | | |
|--|---|
| *11. <i>Korean.</i> 梅田博之. 1973. | 17b. <i>Baluchi.</i> 縄田鉄男. 1981. |
| 11z. <i>Sakhalin Ainu.</i> 村崎恭子. 1978. | 17m. <i>Mazandarani.</i> 縄田鉄男. 1984. |
| *12b. <i>Fukienese.</i> 中嶋幹起. 1976. | 17par. <i>Parachi.</i> 縄田鉄男. 1983. |
| *12z. <i>Tibetan.</i> 北村甫. 1977. | 17s. <i>Shughni.</i> 縄田鉄男. 1980. |
| *13. <i>Indo-Aryan (syntagmatic).</i> 石垣幸雄. 1980. | *20. <i>African.</i> 石垣幸雄. 1975. |
| 13a. <i>Hindi.</i> 溝上富夫. 1980. | *21. <i>Swahili (Kenya & Tanzania).</i> 守野庸雄. 1976. |
| *13b. <i>Marathi.</i> 内藤雅雄. 1976. | *22a. <i>Cushitic (Somalia & Ethiopia).</i> 石垣幸雄. 1972. |
| 13c. <i>Bengali.</i> 奈良毅. 1979. | 22b. <i>Ethiopic (Ethiopia).</i> 石垣幸雄. 1978. |
| 13d. <i>Khaling.</i> 鳥羽季義. 1979/1984(再版). | *23. <i>Hausa (West Africa).</i> 松下周二. 1974. |
| 13e. <i>Panjabi.</i> 溝上富夫. 1981. | *26. <i>Fulfulde (West Africa)(Northern Camerounian Dialect).</i> 江口一久. 1974. |
| *13x. <i>Tamil.</i> 徳永宗雄. 1981. | 33. <i>Romance and Greek(South Europe & Latin America).</i> 石垣幸雄. 1973. |
| 13y. <i>Malayalam.</i> 伊藤正二. 1978. | 33y. <i>Basque (France & Spain).</i> 石垣幸雄. 1979. |
| *14a. <i>Cambodian.</i> 坂本恭章. 1974. | 33z. <i>Maltese (Mediterranean).</i> 石垣幸雄. 1977. |
| *14b. <i>Burmese.</i> 藪司郎. 1974. | 34a. <i>Albanian (Balcan).</i> 石垣幸雄. 1979. |
| 14c. <i>Thai.</i> 森幹男. 1975/1984(再版). | *36. <i>Uralic etc. (Europe & Asia).</i> 石垣幸雄. 1976. |
| *15b. <i>Philippine Languages.</i> 山田幸宏, 土田滋. 1975/1983(再版). | 40. <i>USSR Major (paradigmatic).</i> 石垣幸雄. 1980. |
| *16b. <i>Samoan.</i> 小田真弘. 1977. | |
| *17. <i>Persian.</i> 上岡弘二. 1976. | |

アフリカ部族社会の比較研究

1. 『アフリカ部族社会の特質をめぐって』・1971.
- *2. 『アフリカ社会の地域性』・1973.

アジア・アフリカ語の計数研究 Computational Analyses of Asian & African Languages

- | | |
|---|--|
| *No.1. 1975. | *No.8. 1978. |
| *No.2. 1975. | *No.9. 1978. |
| *No.3. 1976. | *No.10. 1979. |
| *No.4. 『老乞大諺解単字索引』, (CAAAL Monograph Series 1). 郷嘉彦. 1976. | *No.11. 1979. |
| *No.5. 『カンボジア語小辞典』, (CAAAL Monograph Series 2). 坂本恭章. 1976. | *No.12. <i>The Teng-xian Dialect of Chinese</i> , (CAAAL Monograph Series 3). YUE, A. O. 1979. |
| *No.6. 1976. | *No.13. 1980. |
| *No.7. 1977. | *No.14. 『中国語宜蘭方言語彙集』, (CAAAL Monograph Series 4). 藍清漢. 1980. |

- No.15. *A Synchronic Phonology of Modern Colloquial Shanghai*, (CAAAL Monograph Series 5). SHERARD, M. 1980.
- No.16. 1981.
- *No.17. 『納西族図画文字《白蝙蝠取経記》研究(上册)』, (CAAAL Monograph Series 6). 傅懋勳. 1981.
- *No.18. 『僱僱族《創世紀》研究』, (CAAAL Monograph Series 7). 徐琳, 木玉璋. 1981.
- No.19. 1982.
- No.20. *A Lexical Survey of the Shanghai Dialect*, (CAAAL Monograph Series 8). SHERARD, M. 1982.
- *No.21. 1983.
- *No.22. 1984.
- No.23. 『納西族図画文字《白蝙蝠取経記》研究(下冊)』, (CAAAL Monograph Series 9). 傅懋勳. 1984.
- No.24. 1985.
- No.25. 『突破口: 東南アジアの言語から日本語へ — 日の神の民の起源』, (CAAAL Monograph Series 10). ポール・K・ベネディクト: 西義郎(訳). 1985.
- No.26. 1986.
- *No.27. 『白族《黄氏女対経》研究』, (CAAAL Monograph Series 11). 徐琳. 1986.
- No.28. 1987.
- *No.29. 『白族《黄氏女対経》研究(続)』, (CAAAL Monograph Series 12). 徐琳. 1988.
- No.30. 1988.

インド・パキスタン分離独立の史的研究

*資料集 1. 中村平治(編). 1976.

*資料集 2. 中村平治(編). 1977.

南アジアの大河流域における農村社会の研究

- *1. 『南アジア農村社会の研究 1』. 1977.
2. 『南アジア農村社会の研究 2』. 1978.
3. 『南アジア農村社会の研究 3』. 1979.
4. 『南アジア農村社会の研究 4』. 1979.
5. 『南アジア農村社会の研究 5』. 1980.
6. 『南アジア農村社会の研究 6; *Change and Settlement; A Portrait of a Sri Lankan Village*』. PERERA, J. 1985.
- *7. 『南アジア農村社会の研究 7; *A Study on Māriyammān worship in South India*』. NISHIMURA, Y. 1987.
8. 『南アジア農村社会の研究 8; *Health Care in Japan; A Study in Health Sociology*』. VENKATARATNAM, R. 1987.

ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究 (YAK)

- *1. 1977.
2. 1978.
3. 1979.
4. 1980.
5. 1981.
6. 『チベット・ビルマ系諸語文献目録稿; — 1965年以降を中心に —』. 長野泰彦(編). 1982.
7. *Khaling Texts*. TOBA, S. 1983.
8. *A Sharchok Vocabulary; A Language Spoken in Eastern Bhutan*. HOSHI, M. 1987.

日本の言語文化研究リプリントシリーズ

1. 『日本からみた “Thailand: A Loosely Structured Social System”; 日本学と東南アジア学の接点を求めて』. 飯島茂. 1981.
2. 『中国のなかの日本』. 岡田英弘. 1982.

Phraseological Questionnaire

- Vol.1, No.1; *Aquatic Idiomatics*. ISHIGAKI, Y. 1982.
- Vol.1, No.2; *Esculent Idiomatics*. ISHIGAKI, Y. 1982.
- Vol.3, No.1; *Proverbial (1st draft)*. ISHIGAKI, Y. 1981.

Performance in Culture

1. *Culture, Performance and Communication in Iran*. BEEMAN, W. O. 1982.
- *2. *Drama: The Gift of Gods — Culture, Performance and Communication in India*. AWASTHI, S. 1983.
- *3. *Rastafarian Music in Contemporary Jamaica — A Study of Socioreligious Music of the Rastafarian Movement in Jamaica*. NAGASHIMA, Y. S. 1984.
4. *Culture, Performance, and Communication in Turkey*. AND, M. 1987.

5. *Meanings Performed, Symbols Read: Anthropological Studies on Latin America*. OCHIAI, K. 1989.
6. *Aspects of Otherness in Japanese Culture*. RAZ, J. 1992.

Nationalism in Asia and Its International Relations

1. *Transformation and Peasant Movements in Contemporary Asia*. NAKAMURA, H. (ed.) 1985.
2. 『アジア政治の展開と国際関係』. 中村平治 (編). 1986.

象徴と世界観研究叢書

1. 『球体遊戯; —『知』の構想力序説—』. 高知尾仁. 1986.
2. 『春日若宮おん祭と奈良のコスモロジー』. 橋本裕之. 1986.

南アジアにおける社会集団形成過程に関する比較研究

A Comparative Study on the Modes of Inter-Action in Multi-Ethnic Societies

1. 『20世紀初め南インドにおけるカーストと土地保有構造の変動 — ティルチラパッリ県 22カ村の村落地税台帳分析 —』. 柳沢悠, 水島司. 1988.
2. *Vijayanagar Rule in Tamil Country as Revealed Through a Statistical Study of Revenue Terms in Inscriptions*. KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. and SHANMUGAM, P. 1988.
3. *Vijayanagar Rule in Tamil Country as Revealed Through a Statistical Study of Revenue Terms in Inscriptions, Part Two (Appendix III)*. KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. and SHANMUGAM, P. 1989.
4. 『近現代南アジアにおける社会集団と社会変動』. 内藤雅雄 (編). 1990.

多民族国家における異化・同化形態の比較研究 Comparative Study on Community Organization in South Asia

論集

- *1. 『マレーシア社会論集 1』. 1988. 2. 『マレーシア社会論集 2』. 1989. 3. 『マレーシア社会論集 3』. 1993.
- *4. *Local Societies in Malaysia, Vol.1*. MIYAZAKI, K. (ed.) 1992.
5. *Local Societies in Malaysia, Vol.2*. MIZUSHIMA, T. (ed.) 1994.

モノグラフ

1. *The South Indian Muslim Community and the Evolution of the Jawi Peranakan in Penang up to 1948*. FUJIMOTO, H. 1988.
2. 『18-20世紀南インド在地社会の研究』. 水島司. 1990.
3. 『マレー人農村の民間医療に関する文化人類学的研究』. 板垣明美. 1995.

AA 研東南アジア研究 ILCAA Southeast Asian Studies

1. 『世紀転換期における日本・フィリピン関係』. 池端雪浦, 寺見元恵, 早瀬晋三. 1989.
2. 『東南アジアのナショナリズムにおける都市と農村; — 人災病の療法と文化社会的機能 —』. 伊東利勝, 栗原浩英, 中野聡, 根本敬. 1991.
3. *Millenarianism in Asian History*. ISHII, Y. (ed.) 1993.
4. 『防衛研究所所蔵 日本のフィリピン占領関係史料目録』. 川島緑. 1994.

イスラム圏における異文化接触のメカニズム

1. — 市の比較研究 —. 1989. 2. — 市の比較研究 —. 1990. 3. — 人間動態と情報 —. 1994.

辞典編纂

- No.1. 1989. No.2. 1990. No.3. 1991.
- No.4. 『ヒンディー語逆引辞典』. 町田和彦. 1992.
- No.5. 『ラビンドラナート・タゴールの詩「夢見る女」の使用頻度・文脈付語彙集』. 坂本恭章, 奈良毅, B. P. マック. 1993.
- No.6. 『ダルマキールティ著『ブラマナー・ヴァールティカ自註』総語索引』. 小野基, 小田淳一. 1994.
- No.7. 『ブレイムチャンド作「ゴードーン」KWIC索引』. 町田和彦. 1995.
- No.8. 『ダルマキールティ梵文テキストKWIC索引』. 小野基, 小田淳一, 高島淳. 1996.

言語文化接触に関する研究

- No.1. 1989.
No.2. 『晋語平遥方言分類語匯』, (SLCC Monograph Series 1). 侯精一. 1990.
No.3. 『エウキ語基礎語彙集』, (SLCC Monograph Series 2). 杜拉爾, 傲斯爾, 朝克. 1991.
No.4. 『山東省莒縣方言』, (SLCC Monograph Series 3). 石明遠. 1992.
*No.5. 『シンポジウム 満州語の言語学的・文献学的研究』. 中嶋幹起 (編). 1993.
No.6. 『調査報告「中国周辺部における言語接触と社会文化変容 — 漢族文化と非漢族文化との相互関係 —』.
中嶋幹起 (編). 1993.
No.7. 『電腦處理 御製增訂清文鑑 第三冊』. 中嶋幹起 (編). 1995.

A Computer-Assisted Study of South-Asian Languages.
(Annual Report on CIIL-ILCAA Joint Research Project)

- No.1. NARA, T. (ed.) 1989. No.4. NARA, T. (ed.) 1993.
No.2. NARA, T. (ed.) 1991. No.5. NARA, T. (ed.) 1995.
No.3. NARA, T. (ed.) 1992. No.6. NARA, T. and MACHIDA, K. (eds.) 1996.

アジア・アフリカ言語文化資料の情報処理に関する基礎的研究

1. *A Reference Grammar of Mundari*. OSADA, T. 1992.
2. *Studies in Dravidian Phonology*. UČIDA, N. 1993.

South Asians Abroad Series

- *1. *South Asian Community Organisations in East Africa, The United Kingdom, Canada and India*. KOGA, M. (ed.) 1991.
2. *South Asians in the United Kingdom, Tanzania and Canada; Statistical Data from Surveys*. KOGA, M., HAMAGUCHI, T. and NAITO, M. (eds.) 1992.
3. 『南アジア系移民社会の歴史と現状 — イギリス連邦諸国を中心に —』. 内藤雅雄 (編). 1996.

カンボジア研究

- No.1. 坂本恭章, 峰岸真琴 (編). 1994. No.3. 坂本恭章, 峰岸真琴 (編). 1996.
No.2. 坂本恭章, 峰岸真琴 (編). 1995.

外国人研究者出版物

(注外)

1. *Isinay Texts and Translations*. CONSTANTINO, E. 1982. (フクリン)
2. *Intermediate Egyptian Arabic; An Integrative Approach*. EL-ARABY, S. A. 1983.
3. 『我所知道的德王和當時的内蒙古(一)』. 札奇斯欽. 1985.
4. 『西南官話基本文型の記述』. 馬真ほか. 1986.
5. *Tibetan Pilgrimage*. Ekvall, R. B. and DOWNS, J. F. 1987.
6. 『漢語方言文稿集』. 賀巍. 1987.
7. 『渡江書十五音』. 編者不詳: 李榮 (序). 1987.
- *8. 『晋語研究』. 侯精一. 1989.
9. 『八思巴字和蒙古語文獻 I; 研究文集』. 照那斯圖. 1990.
10. 『八思巴字和蒙古語文獻 II; 文獻匯集』. 照那斯圖. 1991.
- *11. *The Significant Role of the Mon Version Dharmaśāstra*. Nai Pan Hla. 1991.
12. *Guinaang Bontok Texts*. REID, L. A. 1992.
13. *Altan Tobči; Eine mongolische Chronik des XVII. Jahrhunderts von Blo bzan bstan 'jin, Text und Index*. VIETZE H. P. and LUBSANG, G. 1992.
- *14. *The Significant Role of the Mon Language and Culture in Southeast Asia, Part I*. Nai Pan Hla. 1992.
15. 『我所知道的德王和當時的内蒙古(二)』. 札奇斯欽. 1993.
16. 『苗語古音構擬』. 王輔世. 1994.

17. 『宣化方言地圖』. 王輔世. 1994.
- *18. *Монголын Туух, Соёл, Туух Бичлэгийн; Судалгаа (Studies in the Mongolian History, Culture and Historiography; Selected Papers)*. Бира, III. 1994.

Studia Culturae Islamicae

1. *Basic Vocabulary in Standard Somali (I)*. NAKANO, A. 1976.
2. *Index of the Arab Herbalist's Materials*. MIKI, W. 1976.
3. *The Arab Dhow Trade in the Indian Ocean; Preliminary Report*. YAJIMA, H. 1976.
4. *Some Documents on the Big Farms (Çiftlik) of the Notables in Western Anatolia*. NAGATA, Y. 1976.
5. "Kaçem Ali", *Monographie d'un domaine autogéré de la plaine de Mitidja (Algérie)*. MIYAJI, K. 1976.
6. *L'émigration et le changement socio-culturel d'un village Kabyle (Algérie)*. MIYAJI, M. 1976.
7. *Village in Ottoman Egypt and Tokugawa Japan — A Comparative Study*. 'Abd al-Raḥīm 'Abd al-Raḥmān and MIKI, W. 1977.
8. *Herb Drugs and Herbalists in the Middle East*. SALAH AHMED, M., HONDA, G., and MIKI, W. 1979.
9. 『インド洋西海域における地域間交流の構造と機能 — ダウ調査報告 2 —』. 家島彦一, 上岡弘二. 1979.
- *10. *Lāri Basic Vocabulary — Lārestānī Studies 1 —*. KAMIOKA, K. and YAMADA, M. 1979.
11. *Materials on the Bosnian Notables*. NAGATA, Y. 1979.
12. *Bibliography on Saljuq Studies*. SHIMIZU, K. 1979.
13. *Tabrizi Vocabulary; an Azeri-Turkish Dialect in Iran*. HANEDA, K. 1979.
14. *Ethnographic Texts in Moroccan Arabic — Report on Moroccan Urban and Rural Life 1 —*. NAKANO, A. 1979.
15. *Ethnographical Texts in Amharic (1)*. TSUGE, Y. 1982.
16. *Hasan Tāj al-Dīn's The Islamic History of the Maldive Islands, with Supplementary Chapters by Muḥammad Muḥibb al-Dīn & Ibrāhīm Sirāj al-Dīn, Vol.1; Arabic Text*. YAJIMA, H. (ed.) 1982.
17. *Somali Folktales (1) — Texts in Somali [1] —*. NAKANO, A. 1982.
18. *Folktales of Lower Egypt (1) — Texts in Egyptian Arabic [1] —*. NAKANO, A. 1982.
19. *Herb Drugs and Herbalists in the Maghrib*. BELLAKHADAR, J., HONDA, G. and MIKI, W. 1982.
20. *Coptic Monasteries at Wadi al Natrun in Egypt — From the Field Notes on the Coptic Monks' Life*. YAMAGATA, T. 1983.
21. *Yatağan; Her Şeyi İle 'Tarihi Yaşatma Denemesi'*. BAYKARA, T. 1984.
22. *Hasan Tāj al-Dīn's The Islamic History of the Maldive Islands, with Supplementary Chapters by Muḥammad Muḥibb al-Dīn & Ibrāhīm Sirāj al-Dīn, Vol.2; Annotations and Indices*. YAJIMA, H. 1984.
23. *The Role of Farmer's Self-Determination, Collective Action and Cooperatives in Agricultural Development: A Case Study of Iran*. NAGHIZADEH, M. 1984.
24. *The Rural Geographic Environment of the Syrian Coastal Region and the Shizuoka Region; A Comparative Study of Syria and Japan*. ABDULSALAM, A. 1985.
25. *Adighean (Western Circassian) Vocabulary*. ABDULSALAM, A. 1985.
26. *Ethnographical Texts in Amharic (2)*. TSUGE, Y. 1985.
27. *Herb Drugs and Herbalists in Turkey*. BAŞER, K.H.C., HONDA, G. and MIKI, W. 1986.
28. *Herb Drugs and Herbalists in Pakistan*. USMANGHANI, K., HONDA, G. and MIKI, W. 1986.
29. *Comparative Vocabulary of Southern Arabic — Mahri, Gibbali and Soqotri*. NAKANO, A. 1986.
- *30. *Comparative Basic Vocabulary of Khonjī and Lāri — Lārestānī Studies 2—*. KAMIOKA, K., RAHBAR, A. and HAMIDI, A. A. 1986.
31. 『Arwād 島; — シリア海岸の海上文化 —』. 家島彦一. 1986.
32. *Ibn 'Arabī's Theory of the Perfect Man and Its Place in the History of Islamic Thought*. TAKESHITA, M. 1987.
33. *A Turkish Dialect in North-Western Anatolia — Bolu Dialect Materials*. HAYASHI, T. 1988.
34. *Mirza Fath Ali Akhundzadeh and Literary Criticism*. PARSINEJAD, I. 1988.
35. *The Syrian Coastal Town of Jabala; Its History and Present Situation*. SATO, T. 1988.
- *36. 『イラン・ザグロス山脈越えのキャラバン・ルート』, (*Iranian Studies 1*). 家島彦一, 上岡弘二. 1988.
- *37. 『ギーラーンの定期市; — 1986年度予備調査報告 —』, (*Iranian Studies 2*). 上岡弘二, 羽田亨一, 家島彦一. 1988.

38. *Pèlerinage de l'Emâm Rezâ; Étude Socio-économiques*. HAKAMI, N. 1989.
- *39. *Herb Drugs and Herbalists in Syria and North Yemen*. HONDA, G., MIKI, W., and SAITO, M. 1990.
40. *The History of Aleppo; Known as ad-Durr al-Muntakhab by Ibn ash-Shihna*. OHTA, K. 1990.
41. *The Japanese and Egyptian Enlightenment; A Comparative Study of Fukuzawa Yukichi and Rifā'ah al-Ṭahṭāwī*. Raouf Abbas Hamed. 1990.
42. *The Green Crescent under the Red Star; Enver Pasha in Soviet Russia 1919-1922*. YAMAGUCHI, M. 1991.
- *43. *A Basic Vocabulary of the Bedouin Arabic Dialect of the Jbāli Tribe (Southern Sinai)*, (*Studia Sinaitica I*). NISHIO, T. 1992.
- *44. イラン現代政治年表 I; 1946年3月-1949年3月, (*Iranian Studies 3*). 日高英實. 1992.
- *45. イラン現代政治年表 II; 1949年3月-1952年3月, (*Iranian Studies 4*). 日高英實. 1993.
- *46. *The Vocabulary of Sasanian Seals*, (*Iranian Studies 5*). YAMAUCHI, K. 1993.
47. イラン現代政治年表 III; 1952年3月-1952年9月, (*Iranian Studies 6*). 日高英實. 1993.
48. *A Basic Vocabulary in Zanzibar Arabic*. NAKANO, A. 1994.
49. *Ethnographical Texts in Modern Western Aramaic (1) (Dialect of Jubb'adin)*, (*Studia Neo-Aramaica 1*). NAKANO, A. 1994.
50. *Ethnographical Texts in Moroccan Berber (1) (Dialect of Anti-Atlas)*, (*Studia Berberi (I)*). NAKANO, A. 1994.
51. イラン現代政治年表 IV; 1952年9月-1953年3月, (*Iranian Studies 7*). 日高英實. 1994.
52. *The Islamic Concept of Belief in the 4th/10th Century; Abū 1-Lait as-Samarqandī's Commentary on Abū Hanīfa (died 150/767) al-Fiqh al-absaṭ*. DAIBER, H. 1995.
53. イラン現代政治年表 V; 1953年3月-1953年6月, (*Iranian Studies 8*). 日高英實. 1995.
54. *Ethnographical Texts in Moroccan Berber (2) (Dialect of Anti-Atlas)*, (*Studia Berberi (II)*). NAKANO, A. 1995.
55. イラン現代政治年表 VI; 1953年6月-1953年8月, (*Iranian Studies 9*). 日高英實. 1996.
56. *Sāri Dialect*, (*Iranian Studies 10*). YOSHIE, S. 1996.

African Languages and Ethnography

1. *Miscellany of Maroua Fulfulde (Northern Cameroun), Vol.1*. EGUCHI, P. K. 1974.
- *2. *A Comparative Vocabulary of Gwandara Dialects*. MATSUSHITA, S. 1975.
3. *L' Histoire des Peuls Férôbé du Diamaré; Maroua et Pétté*. MOHAMMADOU, E. 1976.
4. *Poem of Repentance*. EGUCHI, P. K. (tr.) 1976.
5. *HADITHI za Mapokeo ya Wairaqw (Iraqw Folktales in Tanzania)*. WADA, S. 1976.
6. *Dialogues in Moroccan Shilha (Dialects of Anti-Atlas and Ait-Warain)*. NAKANO, A. 1976.
7. *A San Vocabulary of the Central Kalahari — G//ana and G//wi Dialects —*. TANAKA, J. 1978.
8. *Les Royaumes Foulbé du Plateau de l'Adamaoua au XIX^e siècle; Tibati, Tignè, Banyo, Ngaoundéré*. MOHAMMADOU, E. 1978.
9. *In a Small Town on the Benue; Fula Texts from Gongola State, Northern Nigeria*. MATSUSHITA, S. 1978.
10. *The Classified Vocabulary of the Mbum Language in Mbang Mboum — with Ethnographical Descriptions*. HINO, S. 1978.
11. *Fulfulde Tales of North Cameroon I*. EGUCHI, P. K. 1978.
12. *Catalogue des Archives Coloniales Allemandes du Cameroun; 1. Le Service des Archives Nationale de Yaounde*. MOHAMMADOU, E. 1978.
13. *Fulfulde Tales of North Cameroon II*. EGUCHI, P. K. 1980.
14. *Le Royaume du Wandala ou Mandara au XIX^e siècle*. MOHAMMADOU, E. 1982.
15. *Fulfulde Tales of North Cameroon III*. EGUCHI, P. K. 1982.
16. *A Vocabulary of Beni Amer Dialect of Tigré*. NAKANO, A. 1982.
17. *Peuples et Royaumes du Foubina*. MOHAMMADOU, E. 1983.
18. *Fulfulde Tales of North Cameroon IV*. EGUCHI, P. K. 1984.
19. *Deux Mille Phrases de Swahili Tel Qu'il Se Parle au Zaïre*. KAJI, S. 1985.
20. *Traditions d'Origine des Peuples du Centre et de l'Ouest du Cameroun*. MOHAMMADOU, E. 1986.
21. *An English-Fulfulde Dictionary*. EGUCHI, P. K. 1986.
22. *Les Lamidats du Diamaré et du Mayo-Louti au XIX^e siècle*. MOHAMMADOU, E. 1988.

23. *Traditions Historiques des Peuples du Cameroun Central, Vol.1; Mbere et Mboum; Tikar.* MOHAMMADOU, E. 1990.
24. *Traditions Historiques des Peuples du Cameroun Central, Vol.2; Ni-Zoo, Voute et Kondja.* MOHAMMADOU, E. 1991.
25. *Mobadiliko ya Kijamii Na Riwaya ya Upelelezi Tanzania (Social Changes and Detective Novels of Tanzania).* KIMURA, E. 1992.
26. *Vocabulaire Lingala Classifié.* KAJI, S. 1992.

Sudan Sahel Studies

- No.1. TOMIKAWA, M. (ed.) 1984. No.2. TOMIKAWA, M. (ed.) 1986.

African Urban Studies

- No.1. HINO, S. (ed.) 1990. No.3. HINO, S. (ed.) 1993.
 No.2. HINO, S. (ed.) 1992. No.4. HINO, S. (ed.) 1996.

Bantu Vocabulary Series

- *1. *A Classified Vocabulary of the Mwenyi Language.* YUKAWA, Y. 1987.
2. *A Classified Vocabulary of the Nkoya Language.* YUKAWA, Y. 1987.
3. *A Classified Vocabulary of the Lungu Language.* KAGAYA, R. 1987.
4. *A Classified Vocabulary of the Lenje Language.* KAGAYA, R. 1987.
5. *A Classified Vocabulary of the Nilamba Language.* YUKAWA, Y. 1989.
- *6. *A Classified Vocabulary of the Pare Language.* KAGAYA, R. 1989.
7. *A Classified Vocabulary of the Luba Language.* YUKAWA, Y. 1992.
8. *A Classified Vocabulary of the Bakueri Language.* KAGAYA, R. 1992.
9. *A Classified Vocabulary of the Ha Language.* NAKAGAWA, H. 1992.
10. *A Classified Vocabulary of the Shambala Language with Outline Grammar.* BESHA, R. M. 1993.

Bantu Linguistics (ILCAA)

1. *Studies in Zambian Languages.* 1987. 2. *Studies in Tanzanian Languages.* 1989.
3. *Studies in Cameroonian and Zairean Languages.* 1992.

Boucle du Niger — approches multidisciplinaires —

- No.1. KAWADA, J. (ed.) 1988. No.3. KAWADA, J. (ed.) 1992.
 No.2. KAWADA, J. (ed.) 1990. No.4. KAWADA, J. (ed.) 1994.

ILCAA African Literature Series

1. *Littérature et Politique en Afrique Noire; Regards diachroniques sur le concept de l'engagement politique de l'écrivain dans la littérature africaine de langue française.* WUFELA YAEK'OLINGO, A. 1992.
2. *Littérature Africaine et Christianisation de l'Afrique Noire; La conversion au christianisme - obstacles et motivations - dans la littérature africaine de langue française et anglaise.* WUFELA YAEK'OLINGO, A. 1992.
3. *A la Recherche d'une Identité; Littératures langues et recherche scientifique face au processus du développement au Zaïre.* WUFELA YAEK'OLINGO, A. 1992.
4. *Cent Ans de Recherche sur le Peuple M'ngó; Regards rétrospectifs et prospectifs suivis d'une bibliographie chronologique et sélective.* WUFELA YAEK'OLINGO, A. and SHEMBO SHEKA, F. 1992.

African Language Study Series

1. *Towards a Semantic Typology of Swahili Language*. MKUDE, D. J. 1995.
2. *Annotated Iraqi Lexicon*. MAGHWAY, J. B. 1995.
3. *Some Salient Linguistic Features of an Iraqi Narrative Text*. MAGHWAY, J. B. 1995.

Monumenta Serindica

1. *Changing Aspects of Modern Nepal; Relating to the Ecology, Agriculture and Her People*. IJIMA, S. (ed.) 1977.
2. *The Newari Language; A Classified Lexicon of Its Bhadgaon Dialect*. HASHIMOTO, M. J. (compl.) 1977.
3. *Glo Skad; A Material of a Tibetan Dialect in the Nepal Himalayas*. KITAMURA, H. (ed.) 1977.
4. *Mpi and Lolo-Burmese Microlinguistics*. MATISOFF, J. A. 1978.
5. *Zangskar Vocabulary; A Tibetan Dialect Spoken in Kashmir*. HOSHI, M. and Tondup Tsering. 1978.
6. *Tibeto-Burman Studies 1*. KITAMURA, H., NISHIDA, T. and NISHI, Y. (eds.) 1979.
7. *Amdo Sherpa Dialect; A Material for Tibetan Dialectology*. NAGANO, Y. 1980.
8. *The Structure of the Hsi-hsia (Tangut) Characters*. NISHIDA, T.: MATISOFF, J. A. (tr.) 1979.
9. *Notes on the Origins of Burmese Creaky Tone*. THURGOOD, G. 1981.
10. *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal*. BISTA, D. B., IJIMA, S., ISHII, H., NAGANO, Y., and NISHI, Y. 1982.
11. *Map; The Kingdom of Nepal*. KARAN, P. P., PAUER, G. and IJIMA, S. 1983.
12. *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal II*. TACHIKAWA, M., MIKAME, K., HOSHI, M. and NAGANO, Y. 1984.
13. *Sikkim Himalaya; Development in Mountain Environment*. KARAN, P. P., and PAUER, G. (cartography) 1984.
14. *The Newari Language: A Working Outline*. MALLA, K. P. 1985.
15. *Anthropological and Linguistic Studies of the Kathmandu Valley and the Gandaki Area in Nepal*. ISHII, H., TACHIKAWA, M., NAKAZAWA, S., NAGANO, Y. and HOSHI, M. 1986.
- 15a. 『ネパールにおける言語・文化・社会の動態(研究報告)』. SHARMA, P. R., 三瓶清朝, 山本勇次. 1986.
16. *Aspects of the Phonology of Amdo Tibetan: Ndzorge Śæme Xvra Dialect*. SUN, J. T.-S. 1986.
17. *Bhutan: Development amid Environmental and Cultural Preservation*. KARAN, P. P., and PAUER, G. (cartography) 1987.
18. *Die Cāturmāsya, oder die altindischen Tertialopfer dargestellt nach den Vorschriften der Brāhmaṇas und der Śrautasūtras*. EINO, S. 1988.
19. *Two Essays on the Formation of the East Asian Ethnic World*. SUWA, T. 1989.
20. *Chinese Democracy; Statist Reform, The Self-Government Movement And Republican Revolution*. FINCHER, J. H. 1989.
21. *Theories of Pollution; Theoretical Perspective and Practice in a South Indian Tamil Village*. SEKINE, Y. 1989.
22. *A Newar Buddhist Temple Mantrasiddhi Mahāvihāra and a Photographic Presentation of Gurumaṇḍalapūjā*. SHIMA, I. 1991.
23. 『ネパール語彙集』. 石井溥(編) 1993.
24. *A Descriptive and Historical Account of the Dolakha Newari Dialect*. GENETTI, C. 1994.
25. *Nepal Development and Change in a Landlocked Himalayan Kingdom*. KARAN, P. P. and ISHII, H., and PAUER, G. (cartography) 1994.
26. 『南アジア・東南アジアにおける宗教, 儀礼, 社会 — 「正統」, ダルマの波及・形成と変容 —』. 石井溥(編) 1995.

Studies in Socio-Cultural Change in Rural Villages in Tiruchirapalli District, Tamilnadu, India

1. *Land Control and Social Change in the Lower Kaveri Valley from the 12th to 17th Centuries*. KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. and SHANMUGAM, P. 1980.
2. *Socio-economic Studies of Two Villages; Esanakorai and Peruvalanallur, Lalgudi Taluk*. HARA, T. and KOMOGUCHI, Y. 1981.

3. 『南インド・カーヴェリ河流域の農村社会の史的変容 — アバドゥライ村の土地所有関係を中心にして —』. 柳沢悠. 1981.
4. *Socio-economic Studies of Two Villages; Mahizambadi and Neykulam, Lalgudi Taluk*. SUBBIAH, S., MIZUSHIMA, T. and NARA, T. 1981.
5. *Disintegration and Re-integration of a Rural Society in the Process of Economic Development — The Second Survey of a Tank-based Village in Tamil Nadu*. NAKAMURA, H. 1992.

Socio-Cultural Change in Rural Villages in Tiruchirapalli District, Tamilnadu, India

- Part 1; *Pre-modern Period*. KARASHIMA, N. (ed.) 1983.
 Part 2; *Modern Period 1*. HARA, T., MIZUSHIMA, T. and NAKAMURA, H. 1983.
 Part 2; *Modern Period 2*. YANAGISAWA, H. 1983.
 Part 2; *Modern Period 3*. KOMOGUCHI, Y. 1984.

Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in Bangladesh

- *No.1. UMITSU, M. and HARA, T. 1985.
 No.2. *Some Economic Changes in Rural Bangladesh (Re-survey of a Union in Kushtia)*. FAROUK, A. 1985.
 *No.3. TANIGUCHI, S. and SATO, H. 1985.
 *No.4. *Villages in the Haor-Basin of Bangladesh*. ISLAM, S. 1985.
 No.5. CHOWDHURY, A. 1987.
 *No.6. *Society and Economy of a Rice-producing Village in Northern Bangladesh*. TANIGUCHI, S. 1987.
 No.7. SATOH, T. and UMITSU, M. 1987.
 No.8. *Socio-economic Changes in a Semi-Rural Situation — A Survey in Pabna Town, Bangladesh, 1986*. FAROUK, A. 1987.
 No.9. *Socio-economic changes in Rural Bangladesh: A Case Study of Habashpur Village*. MOHSIN, K. M. 1990.

South Asian Monograph

1. *'Landlords' and Imperial Rule: Change in Bengal Agrarian Society c 1885-1940, Vol.1*. KAWAI, A. 1986.
2. *'Landlords' and Imperial Rule: Change in Bengal Agrarian Society c 1885-1940, Vol.2*. KAWAI, A. 1987.
3. 『南インド在地社会の研究』. 水島司. 1987.

AA-Ken Caribbean Study Series

1. *Comparative Studies on the Plural Societies in the Caribbean, Vol.1*. YAMAGUCHI, M. and NAITO, M. (eds.) 1985.
2. *Money Magic in a Modernizing Maroon Society*. VERNON, D. 1985.
3. *Social and Festive Space in the Caribbean: Comparative Studies on the Plural Societies in the Caribbean, Vol.2*. YAMAGUCHI, M. and NAITO, M. (eds.) 1987.

Bargery Toolbox, based on Rev. G. P. Bargery's A Hausa-English Dictionary

1. *Hausa Dialect Vocabulary, Vol. 1*. MATSUSHITA, S. 1993.
2. *Hausa Dialect Vocabulary, Vol. 2*. MATSUSHITA, S. 1994.
3. *Hausa/asuaH: Back to Front, Vol.1; (A-E)*. MATSUSHITA, S. 1995.
4. *Hausa/asuaH: Back to Front, Vol.2; (F-Z)*. MATSUSHITA, S. 1996.

コンピュータ マニュアル シリーズ

1. VSAMEDIT (テキストエディター) 松下周二. 1984.
- *2. FONTMAKER (文字フォント作成・修正) 今井健二. 1985.
3. BUNPOO (文法: 文字コード変換) 今井健二. 1982.
4. AAFE (文字フォントエディタ) 今井健二. 1985.[廃版]

5. AATEDIT (各種言語テキストエディタ) 今井健二. 1985.[廃版]
 6. 辞書検索表示プログラム. 松下周二. 1986.
 7. TEDIT (フルスクリーンテキストエディタ) 今井健二. 1990.
 8. 電子辞書 DICSEARCH. 松下周二. 1992.
- 別冊 1-4; 文字フォントリスト. 1(1993), 2(1988), 3(1992), 4(1991).
別冊 5; 漢字コード表 1 (ピンイン編). 1994.

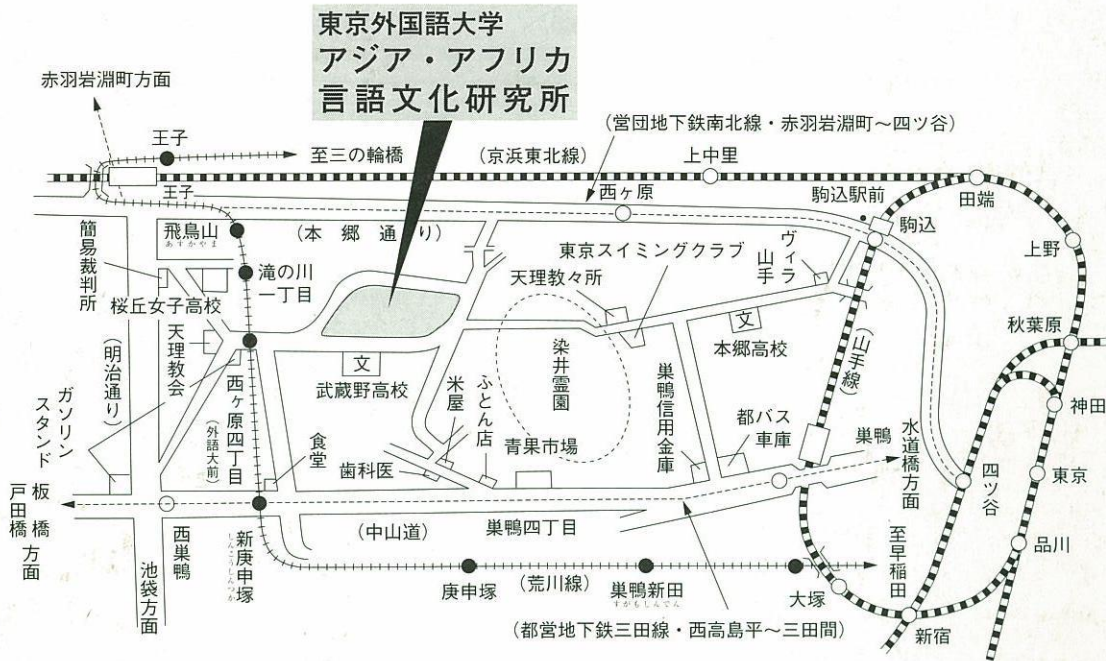
アジア・アフリカ言語データシリーズ Data for the Study of Languages of Asia and Africa

1. 『近世アンコール碑文 — KWIC 索引 —』. 坂本恭章 (編). 1986.
2. *South-Asian Series — Bengali Language (1)*; Rabindranāth Tagore's *Prabhāt-sangīt, Sandhyā-sangīt and Gītāñjali*. MALLIK, B. P., NARA, T. and SAKAMOTO, Y. (eds.) 1987.
3. *South-Asian Series — Bengali Language (2)*; Rabindranāth Tagore's *Gītāñjali*. MALLIK, B. P., NARA, T. and SAKAMOTO, Y. (eds.) 1988.
4. *Austro-Asiatic Series — Khmer (2) Cbap Srei (Edition of Institut Bouddhique, 1962)*. SAKAMOTO, Y. (ed.) 1989.
- *5. *South-Asian Series — Bengali Language (3)*; Rabindranāth Tagore's *Bhānusimha Ṭhākurer Padābalī*. MALLIK, B. P., NARA, T. and SAKAMOTO, Y. (eds.) 1991.
6. *South-Asian Series — Bengali Language (4)*; Rabindranāth Tagore's *Essay Sabhyatār samkaṭ*. MALLIK, B. P., NARA, T., SAKAMOTO, Y. and RAO, T. (eds.) 1994.
7. *South-Asian Series — Bengali Language (5)*; Rabindranāth Tagore's *Essay Kathā o kāhinī*. MALLIK, B. P., NARA, T. and SAKAMOTO, Y. (eds.) 1994.
8. *Syntactic Studies of Indo-Aryan Languages*. SEN, S. 1995.
9. *South-Asian Series — Bengali Language (6)*; Rabindranāth Tagore's *Poem Balākā*. MALLIK, B. P., NARA, T. and SAKAMOTO, Y. (eds.) 1995.

一般研究出版物等

1. 『サンバー語動詞のアクセント』(昭和 57 年度科学研究費補助金 (一般研究 C) 研究成果報告書). 湯川恭敏. 1983.
2. 『コンピューターによる西夏文字の研究に向けて』(COE 研究高度化推進経費). 中嶋幹起 (編). 1996.

交通案内



【交通機関】

1. JR 山手線大塚駅で下車し、都電（荒川線）三の輪橋方面に乗って四つ目の西ヶ原4丁目（外語大前）から徒歩約3分。又はJR 京浜東北線王子駅で下車し、都電（荒川線）早稲田方面に乗って三つ目の西ヶ原4丁目（外語大前）から徒歩約3分。
2. 都営地下鉄三田線西巣鴨駅下車、徒歩約10分。
3. JR 山手線巣鴨駅又は駒込駅下車、徒歩約15分。
4. JR 京浜東北線王子駅南口下車、徒歩約20分。
5. 営団地下鉄南北線西ヶ原駅下車、徒歩約15分。

アジア・アフリカ言語文化研究所
東京外国語大学

〒114東京都北区西ヶ原4丁目51番21号
TEL 03-3910-9147 (代)
FAX 03-5974-3838